W・S・モーム　作　宮川　誠　訳

『聖なる炎』三幕

登場人物

モーリス・タブレット
ハーヴェスター医師
タブレット夫人（ミリー）
ウェイランド看護婦
アリス
リコンダ長官
ステラ・タブレット
コリン・タブレット

物語はロンドン近郊、タブレット夫人の住居ギャトリー・ハウスで起こる。

第一幕

場面　ギャトリー・ハウスの応接間。寛ぎを感じさせる大きな部屋で、調度品はほとんどが古風なもの。色の褪せた更紗木綿に覆われたゆったりとした椅子、いくつかの大きな花瓶には色とりどりの花、英国製の陶磁器、ヴィクトリア朝時代の水彩画が数枚と、銀色のフレームに入った写真が数枚。子供の頃から応接間とは斯くあるべしと老婦人が信じ続け、自ら装飾した部屋で、インテリアデザイナーの手が加わった様子はない。入った瞬間「なんと素晴しい！」と叫んでしまうような部屋ではないが、住環境について敏感な人なら、マフィンを食べながらお茶を飲むにはもってこいの部屋だと納得するだろうし、長椅子のクッションの裏側に手を滑らせれば、隅に置かれたラヴェンダーの香袋が指先に触れるに違いないと思うだろう。

時は初夏六月。爽やかな天気で、庭に通ずるフランス窓は大きく開かれ、そこを通して星が瞬く夜空が見える。

幕が上がると、**タブレット夫人**、**ウェイランド看護婦**、**ハーヴェスター医師**、**モーリス**の姿がある。**タブレット夫人**はタペストリーに刺繍をしている。夫人は小柄でほっそりとしてい

て白髪。物腰は柔らかだが、表情には意志の強さが表れている。顔は、運命が試練を与え過ぎたかのように、窶れ、深く皺がよっている。しかし、同時に、そうした運命と果敢に闘ってゆくだけの剛毅な性格を己の中に発見した者が持つ穏やかさも湛えている。今は黒のセミイヴニングドレスを着ている。**ウェイランド看護婦**は本を読んでいる。歳は二十七かそこらで、可愛らしいというよりも端整といった顔立ち。美しい目をしているが、ちょっと不機嫌そうな表情で、婚期を逃した女性に特有の、ものに飢えたような、どこか悲愴な感じを漂わせている。今は看護婦としての制服ではなく、清楚で地味な柄のワンピース姿。それを通して美しい姿態の輪郭が感じられる。

ハーヴェスター医師とモーリスはチェスをしている。**ハーヴェスター医師**はタブレット家掛り付けの医者。三十半ばで、気だても人付き合いもよさそうな男。金髪に色艶の良い顔、清潔な印象を与える。今はディナージャケットを着ている。**モーリス**はパジャマの上に短めのジャケットを着て病人用のベッドに横たわっている。髪は短く刈られ、髭剃り跡も爽やか、こざっぱりした印象を与える。ハンサムな顔、陽気な物腰、少々燥ぎ過ぎではないかという感じさえする。しかし、からだは痩せ細り、頬は落ちくぼみ蒼白く、黒い目が異様に大きく見える。が、その眸は絶えず微笑んでいて、自分を哀れんでいる様子は微塵もない。

医者が盤面を見つめ、幕が上がった後少々の間がある。

モーリス　（陽気にからかうような調子で）チェスで何より大切なのはスピードなんですよ、先生。

ハーヴェスター　タブレット夫人、この悪たれ小僧にわたしを苛めないように言ってくれませんか。

タブレット夫人　（微笑んで）先生なら、大丈夫、自分のことは自分でできるでしょ。

モーリス　そのビショップを動かされると、ちょっと困るんですがねェ。

ハーヴェスター　（誘導作戦に掻き乱されることなく、盤面を見つめながら）おまえさんの忠告が欲しい時にはこっちからそう言うさ。

モーリス　母さん、その昔、母さんが若かった頃、家に出入りしていた立派なお医者さんたちは、患者に向かってこんなひどい口の利き方をしました？

タブレット夫人　あなたがそんなに喋りっぱなしじゃ、かわいそうに、ウェイランドさんは本に集中できないでしょう。あたしもどこまで編んだのか分からなくなる。

ウェイランド　（本から顔を上げ、気持の良い微笑みを浮かべて）奥様、わたくしのことならお気遣いなく。わたくし、平気ですわ。

モーリス　五年近くも才気あふれる会話を聞かされてきたんで、ウェイランドさんはぼくの言うことに一向注意を払ってくれなくなってしまった。ウェイランドさんにとってぼくは聾唖者みたいなものですよ。

タブレット夫人　（そっけなく）それは誰にも非難できないわ。

モーリス　（陽気に）ぼくが躰の痛みに七転八倒、五万の騎兵隊が一斉に雄叫びを上げたような声で叫んでも、かの乙女は困ったという顔もしない。頬を赤らめもしないんですよ。

ウェイランド　（微笑んで）さぞご立腹でしょうね。

モーリス　ご立腹？　もっと悪いよ。きみには思い遣りってものがない。あーあ、ぼくの看護婦さんが恐怖に青ざめ、後悔の念に啜り泣いてくれたらどんなに救われることか、ただし口は絆創膏で塞いでね。……おっと、先生が駒を動かしそうだ。先生、よーく考えてくださいよ。その辺りには危険な罠が待ちかまえてますよ。

ハーヴェスター　（駒を動かしながら）ナイトを動かすことにしよう。

モーリス　じゃあ、こうやってポーンを進めて、王手って言ったら？

ハーヴェスター　そりゃきみの勝手だが、ちょっと悪趣味だと思うね。

モーリス　ぼくが先生だったらどうするか、判ります？

ハーヴェスター　いいや。

モーリス　テーブルに足を引っかけて、さも偶然のようにひっくり返す。それしかないでしょう、ぼくが仕掛けた最高の罠から逃れるには。

ハーヴェスター　（駒を動かしながら）うるさい。

モーリス　なるほど、そうおいでなすったか。では、っと。

女中の**アリス**が入ってくる。

アリス　失礼いたします。奥様、リコンダ長官がお見えで、まだ遅すぎなければ、ちょっとお邪魔してお酒を一杯頂戴したいとおっしゃっています。

モーリス　ちっとも構わないさ。長官は今どこ？

アリス　玄関先に。

タブレット夫人　お入りくださいって申し上げて。

アリス　かしこまりました。（退場。）

モーリス　先生も、長官は知ってますよね。

ハーヴェスター　まだお目にかかったことはないが。たしか、最近ゴルフ場の側に家を借りた人だよね？

タブレット夫人　ええ、その人よ。昔インドで知合いだったの。だからここに落ち着いたのよ。

モーリス　若い頃の母さんには崇拝者が沢山いましてね。リコンダ長官もその一人だったんだ。お蔭でさぞ惨めな思いをさせられたことでしょうよ、ねえ、母さん？

ハーヴェスター　わかるなァ、わかる。それで、タブレット夫人、その方は今でもまだあなたに叶わぬ恋心を抱いていらっしゃるというわけなんですね。

タブレット夫人　（彼の冷かしを気持よく受け入れて）さあ、どうかしら。直接お訊きになったら？

ハーヴェスター　軍人？

モーリス　いや、警察官さ。最近退職した。とっても好い人だ。ゴルフも上手いと聞いてるよ。コリンが二、三回一緒にプレーしたんだ。

タブレット夫人　今夜夕食にご招待したの、食後みんなでブリッジをしようかと思って。でも、何か用事があって来られないって。

アリスが入ってくる。後ろに**リコンダ長官**。

アリス　リコンダ長官です。（退場。）

リコンダ長官は背が高くほっそりした初老の男で、白髪（はくはつ）に日焼けした顔。物腰はきびきびしている。今はディナージャケットを着ている。

タブレット夫人　（彼と握手しながら）こんばんは。お出でくださってありがとう。

リコンダ　ちょうど家に戻る途中で、見ると、こちらのお宅にまだ明かりが点（とも）っている。で、ちょっとお邪魔したら就寝前の一杯なりご相伴に与（あずか）れるかなと思いましてね。

タブレット夫人　どうぞ、ご自由に。（彼女は頭で合図する。）ウイスキーならテーブルの上。

リコンダ（テーブルの所に行き、ウイスキーをグラスに注ぐ。）では有難く。こんばんは、ウェイランドさん。

ウェイランド　こんばんは、長官。

リコンダ　で、患者さんの具合は？

モーリス　（軽やかに）我慢せねばならぬこと余りに多きを思えばかなり順調、ってとこですかね。

リコンダ　（微笑んで）いつもながら元気そのものですな。

モーリス　感謝、感謝の毎日ですよ。ちょうど、旦那が会社から出たとたんバスに撥ねられて死亡した未亡人のように。もちろん生命保険を掛けた後ですけど。

ハーヴェスター　（笑って）モーリス、また莫迦なことを。

タブレット夫人　長官、ハーヴェスター先生とは初めてよね。

二人は握手する。

ハーヴェスター　初めまして。

リコンダ　初めまして。タブレット夫人が、あなたはとても良（よ）いお医者さんだと。

ハーヴェスター　患者にそう印象づけるように、ひたすら努力しています。

モーリス　先生の唯一の欠点は、自分はチェスができると思い込んでることでしてね。

リコンダ　そうか、邪魔して申し訳ない。

モーリス　なーに、もう終ったも同然ですよ。

ハーヴェスター　何をおっしゃる。まだ手は三つほどあるんだ。（その中の一つを指して）さあ、これならどうだ。

モーリス　（駒を動かしながら）先生は可哀相なお人だ、っと。

ハーヴェスター　くそ！

タブレット夫人　負かしたの？

モーリス　完膚無きまで。
ウェイランド　お片付けいたしましょうか。
モーリス　じゃあ、頼む。

ウェイランド看護婦はチェスの盤と駒を片付け始める。その間も会話は続く。

リコンダ　わたしは一杯飲んだらすぐ引き上げます。ここにうかがったのも、夕食をご一緒できなかったお詫びをしたかったから、それだけなんです。
モーリス　ねえ、急ぐ必要なんてちっともないですよ。どうせ、ぼくも当分寝ないんだから。
タブレット夫人　あたしたち、ステラとコリンが戻るのを待っているの。オペラに出かけたのよ。
リコンダ　そうですか、それなら。わたしは梟みたいなもので、夜は一向気にならない。まあ、已むを得ずベッドには入りますが。
モーリス　先生、先生は治療費の分だけ居てくれればいいわけだから、無理しなくても。
ハーヴェスター　そう？　それじゃ、明日はまた朝から仕事があるから、敗戦の痛みを和らげるべくもう一杯だけ頂戴いて早々に退散いたしますか。
モーリス　じゃあ、長官、他の人には寝室にさがってもらって、二人だけで愉快なゴシップ話でもしましょうか。
リコンダ　いいですな。

タブレット夫人　モーリス、あなた、本当にまだ起きていたいんなら、ウェイランドさんに寝る支度をしておいてもらったら？　そうすればウェイランドさんも休めるでしょう。　あとはコリンがやってくれるわ。
モーリス　分かった。ウェイランドさん、きみの意見は？
ウェイランド　そうですね、モーリスさまのお好きなように。ただ、わたしは夫人がお戻りになるまでは起きていて、モーリスさまが夫人におやすみをおっしゃった後、ベッドまでお連れしようかと思っていました。
モーリス　まあまあ。きみも疲れているようだし。
タブレット夫人　あなた、この頃少し痩せたように思うわ。そろそろ休暇を取ったらどう？
ウェイランド　まだ当分その必要はないかと思います。
モーリス　では、ウェイランドさん、ちょっとお力を拝借、名誉の傷を負った祖国の英雄を寝室までお押しくだされ。
ハーヴェスター　手伝おうか？
モーリス　とんでもない。一人の女性に酷い目にあわされるだけで充分だっていうのに、寄って集って虐められたんじゃ堪りませんよ。
ハーヴェスター　そりゃ、どうも。
モーリス　十分で戻ってくるから。

ウェイランド看護婦がモーリスのベッドを押して部屋から出、ドアを閉める。

リコンダ　良い看護婦さんのようだね。

タブレット夫人　ええ、とっても有能。それに優しくって親切で、あの我慢強さには本当に頭が下がるわ。

リコンダ　負傷してからあの人がずっと看護を？

タブレット夫人　いいえ、あの人の前に三人か四人。だけど、みんな似たり寄ったり。厭な人ばかりだった。

ハーヴェスター　ウェイランドはとても良い看護婦だ。運が良かったですね。

タブレット夫人　そうね、本当に。一つだけ欠点があるとすれば、控え目すぎるってことかしら。くだけたところが全然ない。年に一度、八月に一月だけ休暇を取るほかはずっと一緒にいてくれる、昼も夜も、それも五年にも渡って。それで、じゃあ、あたしが知っていることはといったら、名前がビアトリスだということぐらい。今でも息子たちのことはモーリスさま、コリンさまって呼ぶし、ステラのことはモーリス夫人。いつも壁を作っているようで、親しくなろうって気は全然ないみたいなの。

ハーヴェスター　そうですね。さあ休日だ、お祝いだ、と言って一緒に馬鹿騒ぎできるような人ではありませんね、それは認めます。

タブレット夫人　それにちょっと機転が利かない。モーリスがステラと二人っきりになりたいってこ

とが分からないようなのよ。かわいそうに、あの子には楽しみはほとんどないでしょ、だから、せめて、おやすみぐらいは自分が最後に言いたいんじゃない？　それも他の人がいないところで。今こうしてまだ起きてるのだって、そのためだと思うの。

リコンダ　かわいそうに。

タブレット夫人　ステラにキスもしないで床に付くなんて、あの子には耐えられないはずよ。なのにあの看護婦さんときたら、あれやこれやと仕事を見つけては最後の最後まで側を離れないみたい。モーリスはあの人の気持を傷つけちゃ悪いと思っているから、下がってくれとははっきり言えない。それに感傷的だって思われるのを何より怖れているでしょ、だから、部屋から追い出すのに、それは苦労しているようよ。

ハーヴェスター　あなたの口から直接ウェイランドにそう言ってやればいいじゃないですか。夫が妻におやすみのキスをしたいんなら、そうしちゃいけない理由はないんだから。

タブレット夫人　あの人、とても繊細なの。あなた、気がついたことない？――機転の利かない人っているのよ。人の足を踏んづけておいて、それなら踏まれないようにって足を引っ込めてると気を悪くする。それでこちらはますます惨めな気分にさせられる。そういう人って結構いるわ。

リコンダ　モーリスは全てをあの看護婦さんに頼っているわけですね。

タブレット夫人　ええ、何から何まで。かわいそうに、ああいう躰だと、人に色々と嫌なことをやってもらわなくちゃならないわよね、自分ではできないことを。で、それを人に知られるのは、あの子には耐えられないのよ。特にステラには。

ハーヴェスター　そうですね。わたしも気がついていました。モーリスはステラとは病気の話をしたがらない。

リコンダ　（ハーヴェスターに）本当に恢復の見込みは全くないのかね？

ハーヴェスター　残念ながら。

タブレット夫人　死ななかっただけでも奇跡だった。

ハーヴェスター　酷い事故でしたからね。脊椎の下部がやられて。その上、飛行機が燃え上がったから大火傷を負った。

リコンダ　運がなかったとしか言いようがないな。

タブレット夫人　戦争の間中飛行機に乗っていて、かすり傷ひとつ負わずにいたのに。それが、新型機のテスト飛行であんなことになるなんて。全然予想できなかった。

リコンダ　結婚を契機にパイロットを辞めていれば、と悔やまれますね。

タブレット夫人　今だからそう言えるのよ。

ハーヴェスター　生まれながらのパイロットだった。軍隊の仲間は、モーリスは飛行機乗りとしての本能を持っている、と言ってました。

タブレット夫人　あの子が興味があったのは空を飛ぶことだけ。辞めるようにって説得してみたところで、聞く耳は持たなかったでしょうよ。それに、本当に上手だった。まさか事故を起こすなんて、考えもしなかった。あの子も飛行機ほど安全な乗り物はないって言ってた。

リコンダ　恐れを知らぬ操縦ぶりだったと聞いています。

ハーヴェスター　不思議なのは、今でも昔と全く同じように飛行機に興味を持っていることなんです。主だった飛行のニュース、新型機のテスト、そういうことはみんな知ってます。誰かが世間をアッと言わせる飛行でもしようものなら、もう夢中になって知りたがる。

リコンダ　モーリスの勇気には感心しますな。落ち込んだり、鬱ぎ込んだりする様子がまったくない。

タブレット夫人　ええ、まったくないわ。本当に健気。だから尚更あの子を見てると苦しくなるの。痛みに耐えて額に玉のような汗を浮かべている時でも、口では冗談を言ってるんですもの。

ハーヴェスター　コリンがもうすぐ帰ってしまうのかと思うと残念です。コリンがここにいることでモーリスはかなり救われていると思うんです。

タブレット夫人　小さかった頃、二人はそれは仲が良かったわ、まるで友達みたいに。兄弟って案外仲が悪いものでしょ？

リコンダ　そうですね、実際。

タブレット夫人　コリンは長いことイギリスを留守にしていたの。モーリスが事故に遭う前に中央アメリカに渡ったのよ。

リコンダ　また戻らにゃならんのですか？

タブレット夫人　あの子はお父さんからの遺産をみんなコーヒー農園に投資した。農園は順調にいっているし、あの子も向こうでの生活を楽しんでいる。だから、それを諦めて兄さんの面倒を見るのを手伝ってほしい、って言うのは残酷だと思うの。

ハーヴェスター　確かに、それはフェアーとは言えませんね。人が自分の人生を最大限に活かそうと

している時、それを諦めてくれと頼む権利は誰にもない。

タブレット夫人　（辛口の笑みを浮かべて）頼めるかもしれないけれど、若い人が承諾してくれることはなさそうね。

ハーヴェスター　そうでもないですよ。今イギリスには、病身の母親の介護をするために、自分のことは諦めて、無味乾燥な生活を送っているうら若き女性はごまんといます。

リコンダ　ちょっと前のことだが、バースに滞在していた時、そのような二人連れは結構見掛けましたな。で、正直申し上げれば、どうして娘さんたちは母親を殺してしまわないのだろう、と思ったこともあった。

ハーヴェスター　実際そういうこともあるんですよ。どの医者でもいいから訊いてみてください。かなりのお歳を召したご婦人が、家族か親類に毒を盛られたんじゃないかと疑われる場面に立ち会った経験がある、と答えるでしょう。無論医者はそのことについては一切口外しないように注意していますがね。

リコンダ　何故？

ハーヴェスター　何故って、評判に傷が付きますからね。医者にとって殺人事件に巻き込まれることほど迷惑なことはないんです。

タブレット夫人　あたし、時々真面目に考えるんだけど、あたしのようにもう若くはなくって、でも大した病気も持っていない女は、もしかしたら、アフリカのどこかの部族がやっているように処分してもらうのが一番好いんじゃないかしら。老人が或る年齢に達っしたら、川縁に連れて行って、優しく、でも断固として川の中に沈めるの。

リコンダ　（微笑んで）もし泳げたら？

タブレット夫人　家族はそのための準備もしているのよ。煉瓦の欠片を持って川岸に立っていて、お婆さんが岸に近寄ろうとすると、それを投げ付ける。それでお婆さんも、岸に上がろうという気持がなくなる。

ウェイランド看護婦がドアを開ける。**ハーヴェスター医師**は立ち上がり、彼女が**モーリス**の横たわるベッドを押すのを手伝う。

モーリス　さあ、戻りましたよ。寝る準備は完了。何をして遊びます？　レコードでもかけますか。

ハーヴェスター　わたしはそろそろお暇します。

タブレット夫人　ウェイランドさんもそろそろおやすみなさいな。

ウェイランド　では、ちょっと片付けものをして、それから……。モーリス夫人とコリンさまはオペラの後お食事にいらっしゃるのでしょうか。

モーリス　間違いなく行くさ。久しぶりにこの館から解放されるんだ。ドンチャン騒ぎをしてくるようにくれぐれも言っておいたからね。

ウェイランド　では、四時まではお戻りにならないでしょうね。

モーリス　ぼくがそんな遅くまで起きてるのはよろしくないって言いたいわけだ、この残酷で無慈悲

な看護婦さんは。

ウェイランド　先生はどうお考えで。

ハーヴェスター　よろしくはないね。しかし、モーリスのことだ、お嫁さんが無事に帰ったのを確認するまで寝る気はないだろう。わたしの説では、人間、すべきでないことをする方が健康に良いこともある。

リコンダ　こういうお医者さんに面倒を見てもらいたいものですな。

ハーヴェスター　じゃあ、早く病気になってください。それも、できるだけ長引く病気が歓迎です。そうすれば我が家の庭にテニスコートが作れますから。

リコンダ　どんな病気になろうか考えておくよ。

モーリス　（耳をそばだてて）なんだ？

タブレット夫人　なに？　モーリス。

モーリス　車の音がしなかった？　そうだ、間違いない。ステラだ。あの音は分かるんだ。

車の近づいてくる音が少しづつはっきりしてくる。

リコンダ　こんな遠くからでも分かるというのかい？

モーリス　もちろん。間違いなくあれは我が家の車だ。先生、もうちょっと帰らないでいて、ステラを見ていった方がいいですよ。今日は最高の涎掛けを掛けてますから。あなたのような爛れ目の

人には良い薬になりますよ。

リコンダ　今日の出し物は何だったんだね？

ウェイランド　『トリスタン』だそうです。

モーリス　だから是非とも観に行くようにって言ったんだ。ぼくらが婚約したのは『トリスタン』を観たすぐ後でしたからね。憶えてる？　母さん。

タブレット夫人　もちろん憶えていますよ。

モーリス　ぼくらはみんなで観に行って、その後夕食をすることになっていた。ぼくはその頃持ってた二人乗りのスポーツカーにステラを乗せて、リージェント公園の周りを廻った。結婚するって約束してくれるまでは何周でも廻るよって宣言してね。『トリスタン』の後だったからステラは腹ぺこだった。だから二周目の半ばまで来た時ステラが言ったんだ、――ああ、あなたと結婚するか、それともこのまま飢え死しなくちゃならないんなら、結婚する方を取るってね。

ハーヴェスター　本当？　この嘘みたいな話はほんとに本当なんですか？

タブレット夫人　さあ。詳しくは知らないわ。ただ、二人は当時、お互い、それはそれは夢中だった。憶えているのは、あたしたちが注文をし終わったところへ二人が飛び込んできて、婚約したって言ったことだけ。あの時の二人はまるで、カナリヤを呑み込んだ猫みたいだった。

ドアが開き、**ステラ**が入ってくる。その後に義理の弟の**コリン・タブレット**。**ステラ**は二十八歳、美人である。イヴニングドレスの上にオペラコートを羽織っている。**コリン**は背が高

く、黒髪、三十代前半の美男子。夜会服に白のネクタイ、上にロングコートを着ている。

モーリス　おかえり。

ステラ　ただいま。わたしがいなくて寂しかった？

ステラは**モーリス**のところに行き、額に軽くキスをする。

モーリス　どうしてもう帰ってきちゃったの？　莫迦だなァ、食事をしてくるって約束したのに。

ステラ　オペラに興奮しちゃって、何も食べられそうになかったの。

モーリス　そんなの糞喰らえさ。ルーシャンへ行って、シャンパンでも飲みながら二、三曲踊ってくればよかったのに。折角このおでこの下の二つの目ん玉を疲労困憊させて新しいドレスを選んだんだ、誰にも見せないんじゃ勿体ないよ。（リコンダに）オペラに行くには派手すぎるってステラは言ったんですけど、ぼくが夫の権利を行使して、着て行かせたんです。

ステラ　わたし、幕間にコートを脱いでドレスを披露したかったんだけど、勇気がなかったの。

モーリス　じゃあ、今脱いで、ここにお出での方々にご披露しようよ。帰ってきたらそのドレスをお見せするって約束で、なんとか引き留めておいたんだから。

ステラ　莫迦ねェ。まるで長官や先生にドレスの良し悪しが分かるみたいじゃない。

モーリス　そんなに男を馬鹿にしてはいけませんぞ。さあ、コートを脱いで、皆さんによーく見せて

やって。

ステラ　あなたったら、憎たらしい人。わたし、恥ずかしいわ。

ステラは彼のベッドの角に腰掛けていたのだが、そのままの状態でコートを脱ぐ。

モーリス　さあ、立って。

ステラは暫し躊躇っているが、やがて、コートを腰のところに持ったまま立ち上がり、それからコートを足下に落とす。

ハーヴェスター　素晴しい！

ステラはちょっとよろめく。叫び声が出そうになるが何とかそれを抑える。

モーリス　おっと。どうかしたの？

コリンが**ステラ**を支え、椅子に座らせる。

ステラ　なんでもないわ。ちょっと眩暈がするの。
タブレット夫人　まあ。
モーリス　ステラ。

看護婦と**医者**が**ステラ**のところに行く。

ハーヴェスター　大丈夫。心配ないよ、モーリス。（ステラに）さあ、頭を両足の間において。

ハーヴェスターは手を**ステラ**の首に置き、両足の間に強く押し下げる。**ウェイランド看護婦**が**ステラ**を支えようとして両手を彼女の腰に置く。が、**ステラ**がそれを押し退ける。

ステラ　やめて。触らないで。すぐに良くなるから。わたしって馬鹿ね。
モーリス　ごめん。ぼくの責任だ。
ステラ　なんでもないわ。もう大分よくなった。
タブレット夫人　大方お腹の空きすぎね。お食事をしたのは何時？
コリン　食事はとらなかったんだ。オペラの前にキャビアをちょっと食べてシャンパンを一杯飲んだだけ。
タブレット夫人　変な人たち。

ステラ　わたし、お腹が空いているときの方がワーグナーを堪能できるんです。本当にもうすっかり良くなりましたわ。
タブレット夫人　ウェイランドさん、台所へ行って、このお莫迦な二人に何か食べ物を見つけてやってくださる？
ウェイランド　かしこまりました。ハムがあるはずですから、サンドイッチでもお作りします。
タブレット夫人　コリン、あなたは地下室へ行って、シャンパンを取って来て。
コリン　諒解。実は喉がカラカラ、カラカラって音を立ててたんだ。氷はあったかな？

コリンは**ウェイランド看護婦**のためにドアを開ける。二人は退場。

リコンダ　さて、わたしはお暇します。（ステラに）どうぞお大事に。
ステラ　おかあさまのおっしゃったように、何か食べればすぐによくなりますわ。大きなハムサンドに芥子をたっぷり塗って。
モーリス　顔色が大分よくなったよ。さっきは真っ白だったもの、シーツみたいにさ。
リコンダ　では、おやすみなさい。
タブレット夫人　おやすみなさい。来てくださって本当にありがとう。

リコンダは出てゆく。

ハーヴェスター　もしお邪魔でなければ、わたしはもう暫くここにいます。ハムサンドを食べるところを見届けないと。ちゃんとした食事を摂るということに関して、わたしは近頃の若い女性をあまり信用していないんです。

タブレット夫人は**モーリス**と**ステラ**にちらっと目をやる。そして彼等が二人だけになりたがっているのを悟る。

タブレット夫人　（ハーヴェスター医師に）先生、ちょっとお庭を散歩しませんこと？　とっても暖かくて気持の良い夜ですわ。

ハーヴェスター　いいですね。ウェイランドが気を利かせて、わたしの分もサンドイッチを作ってくれていると有難いな。

ハーヴェスターと**タブレット夫人**退場。二人きりになるとすぐに**ステラ**は夫のところに行き、その唇に愛情のこもったキスをする。**モーリス**は彼女の項に腕を廻す。

モーリス　ステラ。

ステラは**モーリス**の腕から身を離すと、ベッドに腰掛け、夫の痩せ衰えた手を握る。

ステラ　ごめんなさい、見苦しいことになっちゃって。

モーリス　いやァ、驚かせてくれるね、この悪戯者。ぼくの方が死ぬんじゃないかと思ったよ。でも、どうして食事をしてこなかったんだい？

ステラ　食べたくなかったの。家に帰りたかった。

モーリス　名誉に懸けて誓ってほしいな、――ダンスに行かなかったのは、ぼくが起きて待ってるだろうと思ったからだって。

ステラ　お莫迦さんねェ。わたし、あなたが首を長くして待ってるって想像したいの、ね、分かるでしょ？　それに、ダンスなんて好きじゃないし。

モーリス　嘘つきめ。ダンスに夢中じゃない人が、どうしてあんなに上手く踊れるもんか。きみはぼくが一緒に踊った女性の中で最高に上手だ。

ステラ　あら、でも人間って変わってゆくでしょ？　最近じゃダンスも昔とは全然違うし、それにわたしも昔ほど若くないし。

モーリス　二十八は若いよ。まだ少女だと言ってもいいくらいだ。だから、その若さに相応しいことをしているべきなんだ。それなのに今のこの生活といったら……。

ステラ　やめて。そんな風に考えないの。わたしが何かを犠牲にしてるなんて考えないの。

モーリス　でも、ぼくがぼく自身の意見を持つことは許してほしいな。まあ、何にしても、コリンが

いてくれて大助かりさ。きみを無理にでも外出させる理由を拵えることができる。

ステラ　あなたったら。あなたの話を聞いてると、まるでわたし修道院にでも閉じ込められてるみたいね。わたし、しょっちゅう外出してるわ。最近のお芝居はみんな観てるし。

モーリス　そう、おふくろと、昼の部をね。本当に好いおふくろだよ。でも、一緒にいて面白いわけがない。何だ彼だ言っても、同じ年代の人間と一緒にいる方が好いに決まってる、若い者は若い者同士。年寄りには馬鹿みたいにしか思えないことをやる、喋りまくる――それがいいんだ。年寄り連中のなかには、若者に理解があるところを見せようと、にこにこ笑って、いかにも物分りが良いように振舞いたがる人もいるけど、そんなのは糞喰らえだ。若い時には、若いからこそ馬鹿なことをしたいのさ。賢明な若者は必ず馬鹿なことをする。

ステラ　モーリス、そんな警句めいたことは言わないの。警句や箴言はもう時代遅れだって、みんな言ってるわ。

モーリス　足が棒になるまで踊ればよかったのに。そのあと車で月明りの中をぶっ飛ばして。憶えてる？　一度やったよね。朝飯をテムズ川沿いのパブでとって、夜会服のままでさ。あの馬鹿騒ぎ、ほんとに楽しかったなァ。

ステラ　あの頃は気が狂ってたとしか言いようがないわね。今夜は疲れ過ぎて、あんなこととてもできなかった。ただ家に帰りたかった。

モーリス　正直に言えば、きみはドンチャン騒ぎをする習慣をなくしちゃったってことじゃない？

ステラ　あなたと一緒でなくちゃ、ドンチャン騒ぎをしても楽しくないわ。

モーリス　莫迦だなァ、そんな風に考えるなんて。それにしても、あのお莫迦っちょのコリンがもうすぐ帰らなくちゃならないなんて。

ステラ　半年のつもりで帰ってきたのよ。それがもう一年近くも居てくれる。

モーリス　もう少し居てくれるように説得してみるって、きみ、約束したよね。

ステラ　でも、仕事に戻らなくちゃならないのよ。

モーリス　碌でもない農園なんか売っ払っちまって、ここに住めばいいのに。

ステラ　イギリスにいたんじゃ、あの人、陸へ上がった河童みたいなものよ。向こうの生活に慣れちゃったら机の前に一日中座ってるなんて、とてもじゃないけど耐えられないと思うわ。

モーリス　まあ、そうだろうな。ぼくだってきっとうんざりする。おふくろも気の毒に、――役立たずの息子を二人も持って。まあ、もう慣れたか。ぼくは自分のためを考えてたんじゃない、きみのことを考えていたんだ。

ステラ　わたしのことなら自分で考えられますからご心配なく。わたしって、とっても自分勝手な女なの。

モーリス　ごめん、ステラ。でも、ぼくが背中をやられたからって、涎を垂らした知恵遅れみたいには考えてほしくないな。

ステラ　ほかにどんな風に考えようがあって？――あなた、まるで一人っ子の雛の将来をやきもきしてる雌鳥みたい。わたしがつまらない毎日を送ってるんじゃないかって心配ばかりしてるんだもの。わたしはつまらない生活なんか送ってないわ。あなたはやりたいことは何でもさせてくれる。

あなたほど思い遣りのある人はいないわ。わたし、やることはいっぱいあるし、時間は矢のように飛んで行く。退屈するってことがどんなことなのか解らないくらい。ねえ、わたし、時間がなくて、やりたいことの半分もやっていないのよ。

モーリス　そう、きみは素晴しい人だ。……いつも素晴しかった。この惨めな生活を最大限有意義なものにしようとしている。ぼくがそうしなくちゃならないのは当然だが、でも、何故きみまで？　あきらめ？　ぼくは歯を食いしばってでも諦めることを身につけなくちゃならなかった。でも、きみみたいな若い女性が諦めなんて感情とどんな関係があるっていうんだ。

ステラ　ねえ、あなた、そんな言い方しないの。そんなこと考えちゃいけないわ。わたしが結婚したのはあなたを愛してたから。今あなたはわたしの愛をこれまで以上に必要としてる。そんな時愛を与えてあげなかったら、人間じゃないわ。

モーリス　ステラ、ぼくらは義務だからといって人を愛せるわけじゃない。情熱ってのは勝手にやって来て、勝手に去ってゆくんだ。それは誰にも避けられない。

ステラ　（鋭い視線を夫に送る。）モーリス、それ、どういう意味？（夫から視線を逸らして）わたしが前とは違ってるって言いたいの？　そんな風に考えさせるようなこと、わたし何かした？

モーリス　（深い優しさを込めて）いや、全然。きみはいつも天使みたいだ、いつも。（驚いて）あれ、どうかした？　顔が真っ青だよ。また倒れそう？

ステラ　大丈夫……。顔色、そんなに悪い？

モーリス　ねえ、きみがぼくのためにいろいろとやるのは当然だ、――と、そう思っているように見

えることがあったとしたら、ごめん。そんな風に考えてほしくない。どんなにきみが尽くしてくれているか、ぼくはいつも意識している。

ステラ　莫迦ねェ、わたしは何にもしてないわ。ただ当り前のことを当り前にしてるだけ。だって、それ以上はあなたがやらせてくれないんですもの。

モーリス　きみに看護婦の役までやってもらうわけにはいかない、絶対。寝たきりの病人に対してやらなくちゃならない忌わしい仕事をきみがするなんて、とても耐えられない。（ニヤっと笑って）ねえ、消毒の臭いをぷんぷんさせているきみなんて嫌いだ。きみにはいつも夜明けの香りを漂わせていてほしいんだ。ステラ、本当に感謝している。

ステラ　（ふざけて）そう、確かに、感謝する理由が一つはありそうね。

モーリス　（何でもないことのように）ぼくが絶対に恢復しないってことは知ってるよね？

ステラ　そんなことないわ。長い闘いになることはわたしたち皆んな覚悟してるけど、でも、今よりずっと良くなることは確かよ、わたし、そう確信してる。

モーリス　もう少しはましな状態にしてやれるだろうから近々もう一度手術するつもりだ、――そう連中は言うけれど、でも嘘さ。そんなことはぼくにも分かる。希望を与えるために言ってるだけさ。ぼくもそれを信じてる風をしている。その方が簡単だからね。でも、分かってる、ぼくは永遠にこのままだって。

暫く間がある。己の躰の状態が絶望的であることを**モーリス**が自覚しているのを、**ステラ**は

初めて知ったのだ。

ステラ　（熱い思いを込めて）じゃあ、健康で逞しかった頃のことを思い出して、そこに慰めを見いだしましょうよ。二人でいろんなことをやったわよね。わたし、あなたが与えてくれた幸せに感謝する。あなたが与えてくれた愛に永遠に感謝する。大きな愛に。

モーリス　ぼくの愛が変わったと思う？　いや、変わっていない。前と同じようにきみを愛している。今でも深く愛している。……ぼくって、時々センチになって、馬鹿だね。

ステラ　（かすかに微笑んで）センチメンタルになるのはそんなに馬鹿なことかしら。それに、あなたがおセンチになるのはそう滅多にあることじゃないし。

モーリス　ステラ、ぼくにとってはきみが世界のすべてなんだ。確かに、皆んなぼくにとても好くしてくれる。人の親切が本当に分かるようになるのは、ぼくみたいにベッドに縛り付けられた時なんだ。ぼくは恵まれている。みんな掛値なしに善い人だ。最高の人たちだよ。でも、きみが嫌なことをしないで済むんなら、不幸を感じないで済むんなら、そうするためになら、ぼくは連中が一人残らず地獄に堕ちたって気にしない。

ステラ　（軽くからかうような調子に戻って、たしなめるように）そんなこと口が裂けても言わない。好い気はしないわ。わたしならそんなこと聞かされたら誰だって

モーリス　（ちょっと微笑んで）おお、怖。何から何まできみに頼っているぼくとしては即座に前言を撤回しなくちゃならないとこなんだろうけど、でも、そうはしない。だって、ぼくには分かっ

ているから――この心と頭で、いや、それだけじゃない、生き残った末梢神経の全て、この躰の痛みの全てをとおして――きみがどんなに善い人かってことが。

ステラ　（モーリスの言葉を軽く受け止めようとして）あなた、大袈裟なのよね。そんなことばかり言うんなら、今すぐ寝室に運んじゃうわよ。

モーリス　笑うのはきみの勝手だけど、でも、その愛らしい瞳に光っているのは涙じゃないのかい？

ステラ　（突然感極まったかのように）モーリス、わたし、本当はとても弱い女なの、欠点だらけの、罪深い女なの。

モーリス　（急に調子を変えて、しかし、これまで同様深い優しさを込めて）さあさあ、しっかりして、このお莫迦さん。

ステラ　（少しだが、抑えきれない不安が顔に表れる。）どうして今日に限ってそんなこと言うの？

モーリス　（微笑んで）人を笑わすために、いつもピエロみたいに輪を潜ってるわけにもいかないからね。中年にさしかかった紳士には似合わないだろう。しかも、ベッドに括りつけられた病人じゃ、なおさらね。ぼくの迸る冗談の泉が時に枯れることがあったら、ごめん。赦してくだされ。

ステラ　本当にあなた、なにもかも平気なの？

モーリス　ねえ、ぼくのように終日蟄居を命ぜられていると、色々と面白いものを発見するのさ。幸いにして病人にもそれなりの慰めはある。勿論皆んなとても同情してくれるよ。しかしそれに甘えちゃいけない。どうだ容態は、と人は訊く。でも実際は少しも気にしてなんかいないのさ。どうして気にする必要がある。人生は生きている者のためにあるんだから。で、ぼくはと言えば、

死んだも同然なんだ。

ステラ　（何をどう言ったらいいのか途方に暮れて）ああ、モーリス、あなた……。

モーリス　そのうち、こっちも、そんなものかと分かって、〝順調、順調、新しいお札みたいにピンピンですよ〟なんて答えるようになる。会いに来てくれる人を飽きさせないように気を配っているうち、自分のことばかり話すと相手が退屈するってことにも気づく。人間ってのは関心はいつも自分自身にあるのさ。だから相手のことを話題にするってことを憶える。そうしていれば言ってくれるからね、――あいつは賢い奴だ、インテリだって。冗談を言うこと、できるだけ冗談を言うこと、上手（うま）い冗談でも、下手（へた）な冗談でも、冗談なら何でもいいんだ。とにかく笑わせておけば、そんなに気の毒がる必要はないって思うようになる。それが連中には救いになるんだ。で、最終的には、来たときよりも優しい気持になって帰ってゆく。

ステラ　ああ、モーリス、それは真実かも知れないけれど、なんて苦（にが）い真実なの。そんなことを学ばなくちゃならなかったなんて、……わたし、胸が張り裂けそう。

モーリス　そんなに苦いものでもないよ。元々人間なんてその程度のもので、そんな人間性を観察するのは結構楽しいものさ。自分もそれほど哀れな存在ではないって気持になれる。ぼくはいろんなものの中に喜びを見つけることを学んだんだ。他の人たちがやっていることや、本や、その他諸々（もろもろ）のことの中にね。昔はそんなことには全く興味がなかったのにね。まあ、こんなことは言うべきじゃなかったかもしれないけれど、ただこれだけは言っておきたかったんだ、――ぼくが生きてゆく勇気を持ち続けていられるのは、きみがいるからだって。ぼくは不幸せじゃない。いつまで生きられるか判らないけれど、でも、ステラ、きみが助けてくれるなら、こんな躰でもそれなりにやっていけそうな気がするんだ。ぼくはすべてをきみに頼っている。明日もきみに会える、明後日（あさって）も、明々後日（しあさって）も、――そう分かっていることほどぼくにとって大切なことはない。躰のどこかがちょっと痛い時、ぼくは、次にきみが来てキスしてくれる時のことを考える。どきどきするこの胸にきみの柔らかな唇が押しつけられるのを感じているんだ。

ステラ　（深い感情に捉えられて）モーリス、わたしはそんな愛に価するような人間じゃない。自分勝手で、軽率で、恥ずべき人間だわ。

モーリス　そんなことないよ、絶対。

ステラ　どうして今晩わたしを外出させたの？　喜ぶだろうと思ったの？

モーリス　きみのことを考えたわけじゃない。自分のことを考えたんだ。結婚の約束をした夜二人で聴いた音楽をまたきみに聴いてほしかった、それがぼくに喜びを与えてくれると思ったんだ。あの頃ぼくはきみに夢中だった。憶えてる？――第二幕でトリスタンとイゾルデが例の二重唱を歌うよね、きみはあのとき泣いていた。ぼくはきみの手を握っていた。何故あのとき泣いてたの？

ステラ　あなたを愛していたし、それに幸せだったから。

モーリス　今夜も泣いた？

ステラ　さあ、どうかしら。

モーリス　ねえ、あの音楽は凄（すご）いよね。

ステラ　（涙の中で微笑みながら）まあ世間の評判は標準以上ってとこのようね。

モーリス　帰ってきた時、瞳の中にまだその余韻があったよ。光の海みたいにきらきら輝いていた。今夜ほどきみが綺麗に見えたことはない。きみに比べたらミロのヴィーナスなんてチーズの塊(かたまり)みたいなもんだ。

ステラ　（落着きを取り戻し、からかうような調子に戻って）もっと言って、モーリス。そういうお話ならいつまで聞いてても飽きないわ。

モーリス　何週間でも続けられるよ。

ステラ　それは駄目。それじゃ、ただの依怙贔屓(えこひいき)にしか聞こえないもの。サンドイッチが来るまでにして。

モーリス　ねえ、手を握らせて。

ステラ　だーめ。分別を持って。今度の大障害(グランドナショナル)でどの馬が勝ちそうかってお話にしましょ。

モーリス　神様に誓って、今のきみは結婚した頃よりずっと綺麗だ。何故突然こんなに光り輝くようになったんだろう。まるで、たった今世界の創造を終えて、そこに最初の一歩を踏み出そうとしている女神のようだ。

ステラ　自分じゃいつもと少しも変わらないと思ってるんだけど。

モーリス　ぼくは毎日きみを見ているからね、日毎に変化してゆくのが分かる。一年前のきみは、苦悩に苛(さいな)まれたような、強張(こわば)った顔付きだった。でも最近は不思議なほど穏やかに見える。なにか、こう、美しい静謐(せいひつ)とでもいったものを手に入れたみたいな。

ステラ　モーリス、あたしの可愛い子羊さん、残念ながらそれは歳(とし)のせいよ。あなた、そのうちあたしのおでこに最初の皺(しわ)を見つけるわ。次は最初の白髪(しらが)。

モーリス　そんなことはない。きみは決して歳なんか取らない。そんなことには耐えられない。ああ、なんて残酷なんだ、――素晴しいものすべてが、きみの輝く若さが……

ステラ　（モーリスの言葉を素早く遮って）やめて、あなた。お願い。

モーリス　事故に遭ったとき死んでいればよかったんだ。ぼくはきみのために何もできない。誰に対しても何もできない、無用の人間なんだ。

ステラ　ああ、モーリス、どうしてそんなこと言うの？　分からない？――あなたが事故に遭ったと知らされた時どんなに絶望的な気持になったか、それから何日も何日も経って、一命を取り留めたと聞いた時どんなに救われたか、どんなに神様に感謝したか。

モーリス　連中はぼくを生かしておくべきじゃなかったんだ。躰が粉々になった時、どうしてその惨めさから解放してくれなかったんだ。ちょっと多めに麻酔を注射してくれるだけでよかったのに。残酷だよ、生き返らせるなんて。ぼくにとってだけじゃない、きみにとってはその何倍も何十倍も残酷だったんだ。

ステラ　違う。そんなことない。そんなこと言わせない。絶対そんなこと……。

モーリス　ぼくたちに子供がいれば耐えられたのかも知れない。ああ、ステラ、もし子供さえいたら……。その子はきみとぼくなんだって考えられただろう。きみにとっても慰めになっただろう。女性っていうのはやっぱり子供を持つのが運命(さだめ)だから。きみも、人生をまったく無駄にしてしまったと感じないで済んだだろう。

ステラ　でも、あなた、わたしは人生を無駄にしたなんて全然思ってない、全然！　今夜のあなたは変。疲れてるのよ。本当にどうしちゃったの？

モーリス　愛してるよ、ステラ。きみを昔のようにこの腕に抱きしめたい。唇に唇を押しつけて、きみが瞼を閉じて項を反らすのが見たい。その柔らかなからだが欲望で緊張するのを感じたい。ステラ、ステラ、ああ、ぼくは耐えられない。（彼は泣き出し、ステラにしがみつく。）

ステラ　モーリス、あなた、泣かないで、お願い、泣かないで。

モーリスはヒステリックに啜り泣く。**ステラ**は母親が子供をあやすように彼を優しく揺する。やがて**モーリス**は自分を取り戻す。

モーリス　（完全に調子を変えて、事務的に）ああ、なんてお馬鹿だったんだ。ハンカチを取って。

ステラは枕の下からハンカチを取り出すと、それを**モーリス**に渡す。**モーリス**は鼻をかむ。

ステラ　モーリス、驚いたわ。

モーリス　一時的精神錯乱ってやつさ。きみしかいなくて好かったよ。看護婦さんが見てたら、もうでんやわんや。

ステラ　（モーリスの調子に合わせて笑おうとしながら）あなたが看護婦さんの大きな胸に顔を埋めてるところをわたしが見つけてたら、それこそ、てんやわんやじゃ済まなかったわよ。

モーリス　そうおっしゃるんなら、確かにウェイランドの胸は大きいよ。

ステラ　今のところまだ萎れてはいないわね。

モーリス　ねえ、鏡は持ってないよね？

ステラ　鏡なしでどうやって、わたし、このルビーのような唇に口紅を塗ることができて？（彼女は手鏡をハンドバッグから取り出し、モーリスに渡す。）

モーリス　（自分を笑って）こう言っちゃ何だけど、恐れを知らぬ飛行士が……、なんと、涙にぬれたりして。（彼は目の辺りをハンカチで拭う。）

ステラ　白粉を叩いてあげましょうか。取り乱した時にやると、とっても効果があるのよ。

モーリス　まさか！　それより、ハイボールを作ってくれない？

ステラ　わかった。でも、その前にあたし、自分の顔には白粉を叩こうっと。

モーリス　さあ、もうすっかり良くなった。

ステラ　誰か説明してくれないかしら、――どうして白粉をぽんぽんって叩くだけで、女の鼻が、不格好な肉の塊から、顔の中でも一番魅力的な可愛らしいものに変わるのか。

モーリス　それぞ、新聞や雑誌に出てる近代科学の奇跡ってやつさ。

ステラ　じゃあ、ハイボールを作るわ。

モーリス　コリンだ。ステラ、ハイボールはやめてシャンパンにするよ。

コリンが、盆の上にシャンパンとグラス、それに氷を入れたタンブラーを載せて登場。

コリン　遅くなってごめんごめん。

モーリス　あの地下室だ、おまえ一人じゃ迷っちゃうんじゃないかと思ったんだ。いま捜索隊を送ろうとしてたとこさ。

コリン　氷を割るものを探したんだがなかなか見つからなくて。次に針金を切るペンチを探しまくってた。それから、車は車庫に移動した方が好いだろうって。外に一晩中置いときたくないからね。

モーリス　そうこうしている間にステラは刻々餓死に近づいてたってわけだ。

コリン　ウェイランドもすぐ来るよ。ベーコンサンドを作ってた。いやァ、美味そうな匂いがしたよ。

ウェイランド看護婦がサンドイッチを載せた蓋付き大皿を持って入ってくる。

ステラ　さあ、来た。ありがとう。ベーコンサンドは大好物なの。

ウェイランド　ナイフとフォークはお持ちしませんでした。手で食べていただかないと。

ステラ　素敵じゃない。

コリン　ぼくは一っ走り行って着替えてくる。この格好じゃ寛げないから。なに、アッという間に戻ってくるさ。

ステラ　待っていないで食べちゃうわよ。

コリン　どうぞ。でもぼくの分もたっぷり残しておいてくださいよ。さもないと、もう付き合ってやらないから。

コリン退場。**ステラ**は窓辺に寄る。

ステラ　先生、なかにお入りになって、ベーコンが冷めないうちにどうぞ。

モーリス　きみらが豚みたいにガツガツ食べるのを待ってはいられないな。先に寝ることにするよ。

ステラ　シャンパンは？

モーリス　遠慮しとく。ちょっと疲れた。

ステラ　そう。残念だけど、疲れたんなら仕方ないわね。ベッドに入った方が良いわ。

モーリス　寝る前にちょっと寄ってくれるだろう？

ステラ　ええ、もちろん。でも、眠ってたら起こさないわよ。

モーリス　すぐには眠れないよ。ちょっと頭痛がするんだ。なーに、暗いところで少し横になってれば治まるさ。

ウェイランド看護婦が移動ベッドを押し始める。そこへ、**タブレット夫人**と**ハーヴェスター医師**が入ってくる。

ハーヴェスター　お呼びになりましたか？
ステラ　ええ。モーリスは部屋に戻るんですって。
タブレット夫人　そう、それは良かった。もう随分と遅い時間だから。おやすみなさい。ぐっすり眠ってね。

彼女は身を屈めて**モーリス**の額にキスをする。

モーリス　おやすみなさい、母さん。
ハーヴェスター　ウェイランドさん、手を貸そう。
ウェイランド　ありがとうございます、でも慣れてますから、一人で充分やれます。それにモーリスさまはそんなに重くありませんし。
モーリス　元気な頃だって百四十八ポンド以上になったことはなかったんだ。
ハーヴェスター　遠慮しないで。手伝いたいんだ。
モーリス　ウェイランドさん、このお医者さんに治療代の分は働かせようよ。（ロンドン訛を真似て）旦那、おいらの粉薬（こなぐすり）と丸薬（がんやく）を忘れないでくんな。

ウェイランド看護婦がドアを開け、**ハーヴェスター医師**がベッドを押して出てゆく。

ステラ　すぐ戻ってらしてね。サンドイッチが冷めてしまいますよ。

ドアが閉まる。**ステラ**と**タブレット夫人**だけになる。

ステラ　あの人、今夜はとても神経が昂（たか）ぶっているみたいですわ。
タブレット夫人　あたしも気がついた。
ステラ　オペラなんか観に行って、申し訳ない気持。
タブレット夫人　あなたは普段ほとんど外出しないんだから。
ステラ　特に外出したいとも思いませんから、本当に。
タブレット夫人　すっかり疲れているようね。
ステラ　（微笑んで）ええ、すっかり。
タブレット夫人　何かいただいたら？
ステラ　他の人たちが戻るまで待ちますわ。
タブレット夫人　ねえ、たとえどんなことになっても、あたしはあなたがモーリスのためにしてくれたことに深く感謝している、そのことは知っておいてほしいの。
ステラ　（驚いて）何故そんなことを？　まさか、モーリスの具合が？
タブレット夫人　いいえ、そうじゃないわ。あの子はこれまで通りよ。
ステラ　確かに時々、あの人、神経が昂ぶることはあるんですけど。

タブレット夫人　ええ、知ってるわ。
ステラ　でも、驚きましたわ。何故そんなことを突然おっしゃるのか。
タブレット夫人　（微笑んで）言っちゃいけなかったかしら？
ステラ　とっても不吉に聞こえますわ。
タブレット夫人　知っておいてほしいの、あなたがあの子のために大きな犠牲を払ってくれたこと、何年にも渡ってね、――そのことをあたしは充分に分かっている。嫁だから当然だなんて考えていない。
ステラ　おかあさま、そんなことおっしゃらないで。わたし、言葉にならないほどモーリスに同情しています。そうでなかったら人間とは言えない。ああ、本当にかわいそう。だからわたし、あの人の気持を少しでも楽にしてあげられるなら、何でも喜んでします。当然のことですわ。
タブレット夫人　でも、あなたは、恢復の見込みのない寝たきりの人間の世話をするために結婚したわけじゃない。
ステラ　〝病めるときも健やかなるときも共に〟ですわ。
タブレット夫人　あたしみたいなお婆ちゃんといつも一緒じゃ、あなたも退屈でしょう。嫁に好かれる姑になるってとっても難しい。
ステラ　（愛想良く）おかあさま、おかあさまは親切そのものです。おかあさまがいらっしゃらなかったら、わたし、どうしたらいいのか分かりませんでしたわ。
タブレット夫人　あたし、厄介者にならないように務めてきた、それは認める。でも、あなたには、

もしそうしたければ、ここであたしと一緒に暮らすことを拒否する権利があった。あたし、あなたに心から感謝している、モーリスのことだけじゃなく、あたしのためにしてくれたことにも。
ステラ　おかあさま、そんなこと。恥ずかしくなりますわ。
タブレット夫人　あなたはまだ若いし、とっても美しいわ。あなたには他の若い女性と同じようにあなた自身の人生を生きる権利がある。この六年、あなたは一人の男を慰めるっていう、そのことのために全てを諦めてきた。ただの紙切れにすぎない婚姻届が、あの子をあなたに結びつけたから。
ステラ　そんなことありません。愛がわたしたちを結びつけたからですわ。
タブレット夫人　かわいそうに、ステラ、あたし本当に申し訳なく思うの。だから、この先どんなことが待ちうけていても、あたしはあなたの勇気と、自己犠牲と、限りない忍耐を忘れない。
ステラ　（当惑し、少し怖れを抱いて）なにをおっしゃっているのかよく解りません。
タブレット夫人　（寛大な、しかしちょっと皮肉っぽい笑みを浮かべて）そう？　じゃあ、こう考えましょう、――今日はあたしの結婚記念日、あたしは夫のことを思い出している。結婚生活には色んなことがあったわ。好いこと悪いこと、楽しいこと苦しいこと、……

コリンが入ってくる。彼は長いイヴニングコートは脱いで、古いよれよれのゴルフ用の服に着替えている。

コリン　あれ、他の人はどこ？
ステラ　モーリスは寝室にさがった。ハーヴェスター先生はすぐ来ると思う。
タブレット夫人　さあさあ座って、少し食べたら？
コリン　じゃあ、ワインを。

コリンは三つのグラスにワインを注ぐ。その間に**ステラ**はサンドイッチを取ってほんの少し食べる。

ステラ　うーん、美味しい。
タブレット夫人　ウェイランドさんは料理がとても上手だわ、そう思わない？
ステラ　ええ、とっても。

ハーヴェスター医師が入ってくる。

ステラ　早く召し上がらないと、なくなってしまいますよ。舌が蕩けそう。
ハーヴェスター　じゃあ、一口だけ。シャンパンを一杯頂戴いたらすぐ帰ることにします。こんな時間だし、明日は陽が昇ったら直ちに起きなくちゃなりませんからね。
コリン　モーリスは大丈夫？

ハーヴェスター　まあ大丈夫だと思うよ。何故かは判らないが、今夜はちょっと落ち込んでるね。先刻まではあんなに元気だったのに。
タブレット夫人　疲れただけよ。どうしても起きてるってきかなかったんですもの。
ハーヴェスター　ウェイランドは、モーリスを心配させるようなことが何かあったんじゃないかって言ってたが。そうなんですか？
タブレット夫人　さ、どうかしら。あたしには判らない。
ハーヴェスター　モーリスは頭痛がするとしか言わない。とりあえず、睡眠薬を一錠置いてきました。眠れなかったり、夜中に目が覚めて寝付けなくなってしまった時のために。
ステラ　わたし、寝る前に様子を見てみます。ぐっすり眠りさえすれば、朝にはきっといつものあの人に戻っていますわ。
タブレット夫人　ちょっとあの子と一緒にいてやって。
ステラ　もちろんですわ。
ハーヴェスター　さてと、わたしは帰ります。おやすみなさい、タブレット夫人。楽しい晩でした。
タブレット夫人　じゃあ、あたしは先生を玄関までお送りして、そのまま二階に引き上げることにする。じゃ、皆さん、おやすみなさい。
ステラ　おやすみなさい。

タブレット夫人と**ステラ**はキスを交わす。**タブレット夫人**は**コリン**にもキスをする。

タブレット夫人　おやすみ、コリン。二人ともあまり遅くまで起きてちゃ駄目よ。
コリン　それに、ちゃんと明かりを消して、窓も締めて、しっかり鍵が掛かってるか確かめなさい、ってわけだ。分かってますよ,母さん。
タブレット夫人　（息子の揶揄に喜び、ハーヴェスター医師に向かって）息子達があたしをどんな風に扱ってるか、これでお判りでしょ？　年寄りに対してほんとに敬意がないんだから。
コリン　愛情の裏返しってやつですよ。
タブレット夫人　そう？　じゃあ今度は本当に、おやすみ。
ハーヴェスター　わたしからも、おやすみなさい。
ステラ　おやすみなさい。二、三日したらまたお出でくださるんでしょ？
ハーヴェスター　そのつもりです。
コリン　先生、おやすみ。

ハーヴェスター医師と**タブレット夫人**退場。**コリン**は窓に寄り、窓とカーテンを閉め始める。**タブレット夫人**がドアを閉めるとすぐに、**ステラ**はサンドイッチを下に置く。今までは食べている風をしていたに過ぎなかったのだ。彼女は暫く中空を見つめたまま立ち尽くしている。**コリン**は窓とカーテンを閉め終えると、一つを残して部屋の明かりをすべて消す。部屋の暗がりの中、**ステラ**はその一つの明かりに照らされている。**コリン**が彼女の方を向く。

コリン　ステラ、……ステラ。

ステラはむせび泣きながら、**コリン**の方を見る。その目には苦悩が宿っている。

ステラ　ああ、コリン。あたし、切ない。
コリン　（彼女に近づきながら）かわいそうに。
ステラ　触らないで。あたし、どうしたらいいの。あたしたち、何てことをしてしまったの。
コリン　ステラ。
ステラ　モーリスは今夜、いつもと違ってた。あたし、あの人をどう考えたらいいのか判らなかった。もしかしたら、気付いているのかも。
コリン　有り得ない。
ステラ　モーリスには絶対知られたくない。絶対。どんなことをしても。
コリン　本当に申し訳なく思ってる。
ステラ　あたしたちの前にあるのは絶望だけ。絶望……。ああ、あなたは何故わたしを愛したの？わたしは何故あなたを愛してしまったの？
コリン　ステラ。

彼は腕を伸ばす。しかし**ステラ**は**コリン**に背を向ける。

ステラ　ああ、わたし、何てことをしてしまったの。（彼女は両手で顔を覆う。）

［幕］

第二幕

場面は第一幕に同じ。翌日の昼頃。

コリンが書物机（かきものづくえ）に向かって手紙を書いている。メイドの**アリス**が**リコンダ長官**を案内してくる。長官はゴルフウェアーを身に付けている。

アリス　リコンダ長官です。（退場。）

コリン　（立ち上がりながら）こんにちは、長官。

リコンダ　なんてことが起こったんだ。たった今聞いた。なんともショックだ。

コリン　お出でくださって有難うございます。お分かりいただけると思いますが、ぼくたちみんな動転していて。

リコンダ　朝からゴルフをやっていたんだ。九時から試合があってね。それで、倶楽部ハウスに戻ったら聞かされた。信じられん。

コリン　でも本当なんです。

リコンダ　昨夜は健康そうに見えたが。
コリン　いつもより悪いということはなかったですね。
リコンダ　それに随分と元気だった。楽しそうに冗談を次から次へ飛ばしていた。
コリン　ええ、実際。
リコンダ　何がなんだか分からん。倶楽部のブレイクは知っているよな。一緒にプレーしたことがあるかどうかは知らんが。
コリン　会ったことはあります。
リコンダ　バーで一杯やっているとブレイクが近づいてきて、おい、聞いたか？　モーリス・タブレットが昨夜亡くなったそうだ、と言うんだ。いやァ、ショックだった。分かるかね、人間歳をとってくると、知合いが死ぬというのはとてもショックなんだ。
コリン　分かります。
リコンダ　ブレイクは詳しいことは何も知らないと言う。突然容態が悪くなったのかね。
コリン　いいえ。ぼくらは寝る前に軽い食事をとろうとしていたんですが、兄が、ちょっと疲れた、みんなが食べ終えるのを待ってはいられないと言う。かなり遅い時間だったから、当然といえば当然でしょう。ハーヴェスター先生がまだ帰らずにいて、ウェイランドと一緒に兄を寝室に運びました。その時は何も異常はなかったと思います。
リコンダ　眠っている間に亡くなったということかね？
コリン　そう思います。

リコンダ　不幸中の幸いと言うべきか。そういう死に方が最高だよ。みんな自分もそんな風に死ねたら、と思っているんじゃないかな。
コリン　具合が悪くなったということはないと思います。もしそうなら、ベルを鳴らしたはずですから。枕の下にボタンがあって、直接ウェイランドの部屋に繋がっている。ベルが鳴ったんなら駆けつけたはずです。
リコンダ　ウェイランドは何も聞かなかったわけだ。
コリン　ええ、何も。
リコンダ　じゃあ、いつ判ったんだ？
コリン　ご承知だと思いますが、兄は時々寝付かれないことがあって、そんな時は朝かなり遅くまで寝ていた。みんなもそれで良しとしていた。でも、看護婦ってのがどんな人間かお分かりでしょ？　連中はぼくらがどんな夜を過ごしたかなんてことには一向お構いなしに、太陽が昇ればづかづか部屋に入ってくる。人が眠れたかどうかなんて問題じゃない。からだを拭いて、髪を梳かして、ベッドを整え始める。
リコンダ　わかる、わかる。マラリアにやられるのと、有能な看護婦の世話になるのと、どっちが恐ろしいかと訊かれたら返答に窮するね。
コリン　ステラはそういうことをさせなかった。モーリスがベルを鳴らすまで誰も部屋に入ってはいけない、そう主張したんです。
リコンダ　ウェイランドも可哀相に。しかし、まあ、眠っている間はモーリスは幸せだったわけだ。

コリン　その点だけですね、ステラとウェイランドとの間に摩擦があったのは。ウェイランドは実に良い看護婦で、この家に来てから問題を起こしたことは一度もない。いつも落ち着いていて、なんて言うか……、

リコンダ　分かるよ。わたしも最初に会った時すぐに、良い人だなと思った。

コリン　来たばかりの頃はウェイランドもモーリスに〝日課〟を課そうとしたんですよ、自分が一日の始まりだと思う時間――八時に。もし疲れているんならその後また寝ればいいというわけです。しかしステラは頑として譲らなかった。看護婦としてのあなたのやり方に干渉するつもりはないが、この点だけは譲れない、あなたが折れるか、それとも出て行くかだと。

リコンダ　偉い。

コリン　今朝、食事が終わろうとしていた時、九時半頃だったと思いますが、ウェイランドが入ってきた。彼女は朝食はとらないんです。七時に起床すると自分でココアを一杯いれて飲むだけなんです。

リコンダ　近頃の若い女性は苦役に耐えることにかけては天才的だな。

コリン　ウェイランドは真っ青な顔をして、今モーリスさまのところに行ってまいりましたと言う。ベルの音はしなかった、とステラが抗議した。お分かりでしょ、安普請の家がどんなものか。家中どこにいてもベルの音は聞こえるんです。

リコンダ　我が家も似たり寄ったりだ。

コリン　ベルは鳴りませんでした、しかしもうかなり遅い時間だから、様子を見るためにちょっと覗

いてみようと思ったんです、とウェイランドは言う。するとステラが、そんなことは許せない、ベルが鳴るまで入ってはいけないと言ったはずだ、なぜ言われたとおりにしないのか、と憤然として立ち上がった。あんなに怒ったステラを見たことはありません。ウェイランドは震えている。とても変な顔つきだった。怯えているんです。でも、ステラにじゃありません。ぼくは何か良くないことが起こったんじゃないかと不吉な予感がした。まあ、落ち着いて、ステラ、――ぼくは言った。ぼくも立ち上がっていました。ウェイランドさん、どうかしたんですか、とぼくは訊いた。ウェイランドは叫び声のようなものをあげて、拳を握りしめると、モーリスさまがお亡くなりになりました、と言った。

リコンダ　怖ろしい。

コリン　ステラは息を呑んだ。血の気がなくなっていた。

リコンダ　お母さんは？

コリン　母は立派でした。色んなことが一遍に起こっても、まるで別々に起こっているみたいに対処できる人っているじゃないですか。ぼくはステラを助けに行った。気絶して床に倒れこんでしまったんです。どれくらいの時間だったか、ほんの一分かそこらだったと思うけど、ステラがショックで死んでしまったんじゃないかと思いました。母を見ると、椅子に腰掛けてパンを持ったまま、何がなんだか分からないといった、おそろしく青褪めた顔でウェイランドを見つめている。何も言わない。そのうちに震えだして、縮こまるように椅子に凭れこんだ。突然老け込んでしまったように見えました。

リコンダ　何故もっと穏やかに知らせなかったんだ、あの看護婦は。馬鹿め。
コリン　しかし母は誰よりも早く自分を取り戻した。母にあんな強さがあるなんて知りませんでした。
リコンダ　お母さんは千人に一人の人だよ。昔もそうだった。
コリン　母は立ち上がると、ハーヴェスター先生を呼びに行きなさい、と奇妙な声で……（突然言葉がつかえる。）ああ、あの声、あの声が耳から離れない。
リコンダ　コリン、しっかりしろ。きみまでおかしくなってはみんなが困るだろう。落ち着くまで何も喋らん方がいい。
コリン　（落ち着こうとして）大丈夫です。もうお話することはほとんどないんです。母は、ステラはわたしとウェイランドで面倒を見るから心配するな、と言った。その声でウェイランドも我に返ったようで、ステラのところに来ると、母と二人して意識を回復させようとし始めました。そこでぼくは兄の部屋に行った。兄はただ眠っているだけのように見えました。首と心臓に手を当ててみましたが脈はなかった。そのとき初めて本当に死んだんだと思いました。それからぼくは車でハーヴェスター先生の家に行った。先生は往診に出かけてしまっていましたが、おおよそ誰の家にいるかは判ると言うので、そこへ車を飛ばした。運の好いことに先生が捉まり、ここへお連れしたというわけです。先生が言うには、死後二時間以上は経っているとのことでした。
リコンダ　死因について何か言ったかね？
コリン　塞栓症とか何とか。あるいはひょっとしたら心臓麻痺かもしれないと。
リコンダ　ステラの具合は？

コリン　有難いことにもう大丈夫です。しばらくしたら意識が回復したそうです。いやァ、それにしても驚きました、本当に死んじゃったんじゃないかと。
リコンダ　わかる、わかる。
コリン　先生は少し眠った方がいいと言うんですが、ステラは嫌だと言ってきかない。今は兄の部屋にいます。
リコンダ　お母さんは？
コリン　先生が一緒です。今日はいくつか往診があるということで、一旦出かけましたが、つい先刻、あなたのいらっしゃるちょっと前に戻ってきてくれました。ほら、来た。

コリンが話している間に**ハーヴェスター医師**が入ってくる。彼は**リコンダ**と握手を交わす。

ハーヴェスター　おはようございます、長官。
リコンダ　きみも今日は悲しい仕事で、どうも。
ハーヴェスター　タブレット夫人とステラさんには、ひどいショックだったことでしょう。
リコンダ　夫人の様子は？
ハーヴェスター　立派に耐えています。かなり動転しているのでしょうが、それを面に出さないように努めていらっしゃる。たいした自制心だ。
リコンダ　わたしに会ってくれるだろうか。

ハーヴェスター　ええ、きっと会いたがっていると思います。
コリン　二階へ行って訊いてきましょうか。
リコンダ　そうしてくれれば有難い。もし会いたくないなら遠慮なくそう言ってほしいと伝えてくれ、邪魔はしたくないから。気持はよく分かると。しかし、わたしに会うことが少しでも慰めになるなら、喜んでお会いしたいと。
コリン　諒解。

コリン退場。

リコンダ　夫人とはもう三十年以上の付合いになる。旦那さんはインドの行政官でね。
ハーヴェスター　夫人から聞きました。
リコンダ　インドで最初に昵懇になったのがタブレット夫妻だった。夫人は、今もそうだが、素晴しい人で、誰からも愛されていた。
ハーヴェスター　そうでしょうね。夫人とはこの五年お付合いさせてもらっていますが、本当に善い人です。ステラさんも同じですが。
リコンダ　ある意味、感謝すべきことなのかも知れない、これで何もかも終わったんだから。
ハーヴェスター　確かに。モーリスがあれ以上恢復することは有り得なかったんですから。
リコンダ　そう。きみは昨夜そう言った。

ハーヴェスター　勿論この先何年かは生きられたかもしれない、あのままの状態で。でも、それでどうだっていうんです？　モーリス自身が惨めだっただけじゃない、家族全員が惨めだったんです。
リコンダ　周りの人たちはみんなモーリスのために犠牲を惜しまなかった、そうだろう？
ハーヴェスター　ええ、その通りです。みなさん一生懸命尽くしていた。
リコンダ　モーリスの死がこんなに突然でなければよかったんだが。
ハーヴェスター　どうしてです？　肺炎だとか何だとか、あの体力では到底回復の難しい病気に罹って、苦しみながら死んでゆくよりは、ああして突然神様に召されたのはかえって良かったんじゃないでしょうか。
リコンダ　モーリス自身に関しては確かにそうだろう。わたしの考えていたのはお母さんとステラのことだ。

ウェイランドが入ってくる。今は看護婦の制服を着ている。

ハーヴェスター　ウェイランドさん、きみは休んでるものだと思ってたよ。
リコンダ　おはよう。
ウェイランド　おはようございます、長官。お出でいただいて有難うございます。タブレット夫人がお喜びになると思います。
ハーヴェスター　横になった方がいいんじゃないかね。さっきもそう言ったと思うが。

ウェイランド　とても休めそうにないんです。
ハーヴェスター　なら、散歩でもしたら？　座ったまま鬱ぎ込んでいるよりはその方がいいと思うよ。
リコンダ　ウェイランドさん、今回の件はきみにとっても大変なショックだったろう。何と言っても、きみは長い間モーリスの世話をしてきたんだから。
ウェイランド　ええ、ショックでした。モーリスさまは本当に好い方で、称讃せずにはいられませんでした。普通の人ならとても耐えられない逆境に勇敢に耐えていらっしゃった。
ハーヴェスター　最高の男だった。その点、誰も異論はないだろう。
ウェイランド　当然ですが、わたくしはあの方に好意を感じていました。いつもとても明るくて、わたくしのすることに心から感謝してくださった。
リコンダ　次の仕事を始める前に充分な休みを取った方がいいな。
ウェイランド　これからのことは、まだ何も考えていません。
ハーヴェスター　サウスコーストに住んでいるきみの友人とやらはどうかね？　その人たちの処で暫く過ごしてみたら？　正直言って、きみはひどく体調が悪いように見える。
ウェイランド　（気が乗らない様子で）そうでしょうか。
ハーヴェスター　今度の件をあまり深刻に考えない方がいい。
ウェイランド　当然ですが、看護婦にとって患者が亡くなるのは嬉しいことではありません。特に今回のように突然に。
ハーヴェスター　容態が急変することは考えられないことではなかったんだ。

ウェイランド　なんだか、必要がなくなったからといって吹き消される蝋燭のようですね。でも、その炎はどこへ行くんです？

ハーヴェスターは何かを考えるように**ウェイランド**の顔を見つめる。

ハーヴェスター　（優しく）ねえ、きみ、きみはモーリスの死を必要以上に気に病んでいるが、あまり賢明なことじゃないと思うよ。
ウェイランド　（苦々しい調子で）モーリスさまはわたしにとって単に患者の一人にすぎない、そうお考えで？　看護婦だって人間です。不思議にお思いになるかもしれませんが、他の人たちと同じように感情を持っているんです。
ハーヴェスター　勿論そうさ。しかし、その感情に溺れて常識を見失ってしまったら、それが自分のため、患者のためになるかね？
ウェイランド　わたしが看護婦としての務めを充分に果たしていないと？
ハーヴェスター　そういうことじゃない。きみは骨身を惜しまず尽くしてくれた。尽くしすぎて、すこし疲れたんじゃないか。だから暫く休暇を取ったらと勧めているんだ。今きみに必要なのはゆったりとした時間だ。
ウェイランド　先生は、モーリスさまの死因は何だと？
ハーヴェスター　心臓麻痺だと思う。

ウェイランド　誰も彼も心臓麻痺ですね。
ハーヴェスター　そうさ。死亡証明書に書くのにこれ以上便利な病名があるかね？
ウェイランド　検屍は行ないますか。
ハーヴェスター　いや。何故そんなことをしなくちゃならないんだね。まったく必要ない。
ウェイランド　（医者の顔をじっと見つめながら）わたくしはすべきだと思います。
ハーヴェスター　（辛辣にならないように努めながら）申し訳ないが、そのつもりはないね。わたしが証明書にサインすると言っている以上、誰にも口を出す権利はない。
ウェイランド　先生は、モーリスさまはこの先何年も生きられるだろうと、何度もおっしゃいましたよね。
ハーヴェスター　その可能性はあった。しかし、今だから言えるが、モーリスが死んだことは家族にとっては有難いことだったのかもしれないんだ。
ウェイランド　（ゆっくりと）モーリス・タブレットさまは、殺されたのです。
ハーヴェスター　何を言ってるんだ！
ウェイランド　繰り返しましょうか。モーリス・タブレットさまは殺されたのです。
ハーヴェスター　くだらん！
リコンダ　ウェイランドさん、きみは今動転しているんだ。それは当然のことだが、しかし、冷静にならなくては。心にもないことを軽々（けいけい）に口にすべきではない。
ウェイランド　わたくしは冷静ですし、自分が何を言っているか充分にわきまえています。

リコンダ　きみの言葉を文字通り受け取れ、ということかね？
ウェイランド　そうです。
リコンダ　（重々しく）きみの発言は極めて重大なものだが、そのことは承知の上だね？
ウェイランド　承知しております。
ハーヴェスター　馬鹿々々しいにも程（ほど）がある！
ウェイランド　先生はわたくしのことを五年間見ていらっしゃいました。これまでわたしがノイローゼだとかヒステリックになったことがあったでしょうか。訳の分からない、誇大妄想のようなことを口走ったことがあったでしょうか。
リコンダ　先生、この人の話を一応聞いてみようじゃないか。ウェイランドさん、ひょっとしたら、きみはハーヴェスター先生の治療の仕方に不満があったんじゃないのかね？
ハーヴェスター　何だ、そういうことか。それなら解る。何か言いたいことがあるんなら遠慮なく言ってくれ、気を悪くするようなことは絶対ないから。わたしは恰好を付けるつもりはない。もしわたしのやり方に何か不満があったんなら、言ってしまった方が好（い）いだろう。わたしもできるだけ説明するつもりだ。
ウェイランド　わたくしの知る限り、先生はモーリスさまのために、現在の医学にできることは全てなさったと思います。
リコンダ　それに、確かモーリスは、何人か専門医にも診てもらっていた、そうだろう？
ハーヴェスター　少なくとも六人の医者に。

リコンダ　で？　ウェイランドさん。

ウェイランド　わたくしは専門の訓練を受けた看護婦です。お分かりいただけると思いますが、もしモーリスさまがハーヴェスター先生の治療ミスでお亡くなりになったとしたら、そのことをわざわざご家族に知らせて一層の苦しみを与えるようなことはいたしません。

ハーヴェスター　今のこんな状況においては不謹慎な発言は差し控えるべきなんだろうが、ウェイランドさん、あなたの度量の大きさには感謝感激雨霰（あめあられ）です。

ウェイランド　不謹慎であろうと、卑下されようと、皮肉をおっしゃろうと、それは先生の勝手です。わたくしには関係ありません。

リコンダ　（うっすらと笑みを浮かべて）二人とも、もうちょっと礼節をわきまえて話しても別に害にはならないと思うがね、いま少しの間だけでも。

ウェイランド　わたくしは断固告発します。取り消すことはありません。

ハーヴェスター　モーリス・タブレットを殺害した人間、あるいは複数の人間を？

ウェイランド　そうです。

ハーヴェスター　しかし、きみ、一体誰があの不幸なモーリスを殺害したいなんて思うんだ。

ウェイランド　それは今のところわたくしには関係ないことです。

ハーヴェスター　いいかい、ウェイランドさん、きみにもよーく分かっていると思うが、モーリスの家族、それに周りの人たちは、一人残らずモーリスを愛していた。こんなに温かな愛情に包まれて暮らせる者は滅多にいない。モーリスに危害を加えたいと思う人間がいるなんて、そんなことは信じられない。

ウェイランド　わたくしが何を考えているか、あるいは何は考えていないのか、それを今ここでお話する必要はありません。まだ証人席に座っているわけではありませんし。

ハーヴェスター　証人席？（嘲るように）もうきみは刑事裁判所（オールドベイリー）で派手な証言をしているところを想像しているわけだ。

ウェイランド　裁判所に出頭して証言をする、そしてそれが、スキャンダラスな評判を呼ぶ、――わたくしにとってそれほど嫌なことはありません。これは正直な気持です。

ハーヴェスター　必ず評判になるさ。新聞が飛びつきたくなるような楽しいものが一杯詰（つ）まっているからね。さあさあ、ウェイランドさん、分かるだろう？　頼むよ。モーリスの死は自然死だったんだ、そのことはぼくもきみも知っている。余計なことで騒ぎ立てて、みんなを困らせて、それで何になるというんだ。

ウェイランド　もし自然死なら、検屍で判ります。自然死と判明すれば、それ以上は何も申しません。

ハーヴェスター　（苛立って）検屍はやらない。ご家族がどんなに嫌がることか。

ウェイランド　何が出てくるか、それが怖いんですか？

ハーヴェスター　（きっぱりと）そんなことはない。

ウェイランド　（挑戦的に）警告しておきますが、もし死亡証明書にサインなさったら、わたくしはその足で検屍官のところに行って抗議します。

ハーヴェスター　タブレット家の人たちは、それでなくても、耐えなくちゃならないことがいっぱい

あるんだ。きみはそれに加えて、更にご家族を苦しめようというのか。

ウェイランド　リコンダ長官、あなたはインドで警察官をなさっていらっしゃいました。ですから、こうした場合どうすべきかご存じのはずです。おっしゃってください、自分の看ていた患者が何者かに殺害されたと信じるに足る充分な理由を持つ場合、何をするのがその看護婦の義務なのか。

リコンダ　その質問は、できればしてほしくなかった。看護婦としてなすべきことは極めて明らかだが、しかし、そうすることで、これまで常に変わることなく親切に接してくれたご家族を、大衆の好奇の目に曝し、計り知れない苦痛を与えることになるのだ。そうであるからには、その告発には確かな根拠がなくてはならない。その点はいいね？

ハーヴェスター　そうだ。どんな根拠があるというんだ？　きみは告発すると言う。しかし、わたしの思い出せる範囲では、どんな事実に基づいて告発するつもりなのか、まだ仄めかすことさえしていない。

ウェイランド　検屍をするとおっしゃっていれば、その結果が出るまで、何も申し上げる必要はなかったのです。でも、あなたはわたしを引き返せないところまで追い詰めた。長官のおっしゃるとおりです、タブレット家の方々はとても親切にしてくださいました。ですから、直接的にせよ、間接的にせよ、皆さまに関わることを陰でコソコソ申し上げるわけにはまいりません。

ハーヴェスター　全員を集めてほしい、ということかね？

ウェイランド　お願いします。

リコンダ　それが一番かもしれん。しかし、ウェイランドさん、もう一度確認しておくが、本当にこ

の話をハーヴェスター先生とわたしの胸の内だけに収めておくわけにはいかんのだね？　どんな不快な結果になろうとタブレット家の人たちに知らせる、――そう理解していいんだね？

ウェイランド　はい、覚悟は出来ています。それに、奥様はもうすぐ下りていらっしゃいます。

リコンダ　ステラは今どこに？

ハーヴェスター　ステラも聞くべきなんですか？

リコンダ　その方がいいだろう。

ハーヴェスター　じゃあ、捜してきましょう。

リコンダ　モーリスの部屋にいるはずだ。

ハーヴェスターは出て行く。

ウェイランド　長官、わたくしが全てを話し終えるまでは、何も判断なさらないでください。

リコンダ　（幾分厳しい調子で）ウェイランド君、わたしはこの家の人たちとは長い付合いで、とりわけタブレット夫人とは昵懇にしていただいている。だから、きみが選りに選ってこんな時に、ご家族の苦しみに更に苦しみを加えるようなことを自分の義務だと考えたことが残念でならない。きみの根拠とやらが不確かなものであることが示されるのを願うのみだ。

ウェイランド　そうなったら、ご遠慮なさらず、わたくしを荷物共々この家から叩き出してください。

リコンダ　残念ながら、ここはわたしの家ではない。コリンがその喜ばしい役目をわたしに譲ってく

れるかどうか。

ウェイランド　〝喜ばしい！〟それはわたしも同じです、誰が味方で誰が敵かが判って。

タブレット夫人がコリンと一緒に入ってくる。夫人は微かな笑みを浮かべて**リコンダ長官**に近づく。彼女は落ち着いていて、穏やかな表情である。

タブレット夫人　リコンダ。

リコンダ　ちょっとお寄りせねばと思いまして。このたびは本当になんと申し上げたらよいのか、心からお悔やみ申し上げます。わたしにできることがあったら何なりと……

タブレット夫人　（うっすら笑みを浮かべ、彼の言葉を遮って）来てくださってありがとう。あなたらしいわ。

リコンダ　さぞ辛かったでしょう。しかし、それに雄々しく耐えているお姿を見て少し安心しました。

タブレット夫人　あたし自身の感情は心から追いやるようにしているの。ただ、これでやっとあの子の長い苦難が終ったんだなって、そう考えるようにしている。あの子は、勇敢で、頓着がなくって、本当に好い性格の子だった。ベッドに縛り付けられた人生を送るために生まれてきた子じゃないわ。

リコンダ　思い出します、モーリスは元気一杯の子だった。

タブレット夫人　だから、あの子が死んだからといって、あたしは泣かない。むしろ喜びたいの、あ

の子は自由になったんだって。

ステラが庭から入ってくる。**ハーヴェスター医師**が彼女に続く。**ステラ**は白い服を着ている。

ステラ　長官がわたしをお待ちだと。

リコンダ　ステラ、このたびのご不幸には、なんと申し上げたらよいのか。心からお悔やみ申し上げます。

ステラ　モーリスとは、よく死について話しましたわ。あの人は死を怖れてはいませんでした。戦争中何度も死には直面した、だから死というものをそんなに重要視はしていない、と。あの人はわたしたちが悲嘆に暮れることは喜ばないでしょう。わたしには喪服は着ないでくれと申しておりました。自分が死んでもいつも通りでいてほしい、家に閉じこもらないで自分が生きている時と同じように生活してほしい、と。

タブレット夫人　あの子はあなたをとても愛していたわ。あなたの幸せを何より願っていた。

ステラ　分かっていますわ。

コリン　何故か、スティーヴンソンの一節が頭に浮かんでくるんだ。「船乗りは海より戻りぬ、そのふるさとへ」

リコンダ　「ふるさとへ、狩人は丘より戻りぬ、そのふるさとへ」（注1）我々のように故郷を遠く離れた土地で暮らした者にとっては、心に滲みる一節です。

ステラ　モーリスは、今ここにある人生だけで全てが終ってしまうとは信じていませんでした。大抵の人たちが多かれ少なかれ信じている多くのことをあの人は……

タブレット夫人　（ステラの言葉を遮って）ねえ、あたしは自分が信じられないことを子供たちに教える気にはなれなかったの。二人がまだ小さかった頃、よくテラスに出て星を見たわ。インドの深い深い紺色の空に、沢山の流れ星が見えた。あたしは考えた、――一体人間って何なのかしら、こんなにもちっぽけで、こんなにも儚い、でも、悩んだり苦しんだりすることもできれば、美しいものを情熱的に愛することもできる。あたし、宇宙の大きさと神秘に圧倒された。いま目にしているこの広大な世界を造ったものは何なのか、どんな力がこの世界を動かしているのか、あたしには分からなかったけれど、心は驚きと畏怖の念で満たされていた。ぼんやりとだけど、そのとき何となく分かったような気がしたことがあるの。でも、それは途方もない考えで、普段あたしたちが信じているものの範疇にはとても収まりきらないものだった。

ステラ　モーリスはしょっちゅう冗談を言っては笑っていましたわ。真面目な話をしている時でも、目は悪戯でもしているようにキラキラ輝いているんです。だから、あの人、心の中では自分自身を笑い飛ばして喜んでいるんじゃないかって、子供の頃乳母や召使に聞かされたお話が無意識のうちにからだに沁みついていて今でもそれを信じているんじゃないか、心は子供のまま大人になったんじゃないかって、そう思うんです。

タブレット夫人　いつもインド人の乳母が一緒でしたからね。乳母から何を教わったことやら。

ステラ　モーリスは何かを信じる時、理性では信じなかった。もっと不思議な、心というか、神経と

いうか、そうしたもので信じていたように思います。ひょっとしたら、東洋の輪廻転生の考えを信じていたのかもしれない。

リコンダ　人間、子供の頃に教わったことから完全に抜け出すことはできるんだろうか。

ステラ　モーリスは心のどこか深いところで信じていたように思うんです、――自分の魂は、この傷ついた肉体を離れる時、別の住処を見つけるんだって。自分は生命力に溢れているんだ、だから、たとえ一旦は死んでも、またこの世に生き返らないわけがないって。

タブレット夫人　わたしも、よく、そう信じられたらなって思ったわ。どんなに慰めになるだろうって。二度目の生命、三度目の生命、……或る生命から別の生命へと移って行くたびに、不完全さからの脱皮を繰り返して前世での罪を贖ってゆく。そして終には、自我というものから完全に解き放され、永久の存在と一つになって永久の安らぎを手に入れる。

ステラ　（ウェイランドの方を向いて）ウェイランドさん、お話したいことがあるの。あなたはすぐにでもこの家を離れるのよね？

ウェイランド　はい、多分。

ステラ　あなたがモーリスのためにしてくださったことに心から感謝しています。どんなに有難く思っていたか、そのことを申し上げておきたいの。

ウェイランド　わたしはすべきことをしただけです。

ステラ　（魅力的な笑みを浮かべて）あら、そんなことないわ。あなたはそれ以上のことをしてくださった。仕事だと割り切っていたら、あんなに親身になって看護はしてくださらなかったでしょ

うし、モーリスの必要なものを前もって手配するなんてできなかったでしょう。あなたは本当に優しくて親切だった。

ウェイランド　（少し不機嫌そうに）モーリスさまは患者としてはとても扱い易い御方でした。わたしに迷惑をかけないようにといつも気を遣ってくださいました。

ステラ　それで実はちょっとあなたにお諮りしたいことがあるんだけれど。もうおかあさまにはお話して、賛成いただいているの。あなたは長いこと大変なお仕事をしてくださった、年一度の一月の休暇もほとんど休息にならないほど。あなた、よく、日本で暮らしてるお姉さまについて話して、いつか是非行ってみたいとおっしゃっていたわよね。もしよかったら、わたし、あなたが東洋へ行って楽しい時を過ごすのをお手伝いしたいの。

ウェイランド　（頑に自分を守ろうとするかのように）どういうことなのか理解いたしかねます。

ステラ　（少し恥ずかしそうに、しかし無邪気に）つまり、その、看護婦さんのお給料って決して良くはないでしょ？　モーリスは全財産をわたしに残してくれた。わたしたちの生活は約ましいものだったから、わたしがこの先暮らしてゆくには充分すぎるほどなの。だから、もしあなたが数百ポンド、あるいは切りよく、例えば一千ポンドを、わたしからのプレゼントとして受け取ってくれたら嬉しいなって思うの。そうすれば暫くはお金の心配をしないで、ゆっくりと旅行ができるでしょ？

ウェイランド　（昂ぶる感情を何とか抑えようとしながら、嗄れ声で）わたしがあなたからお金を受け取るとお思いで？　わたしをそんな人間だとお考えだったんですか。

ステラ　（驚いて、しかしウェイランドの言葉をあまり重大に受け取った様子はなく）でも、一体どこがいけないの？　ウェイランドさん、理性的になって。わたしはあなたを怒らせたいなんて思っていないわ、分かるでしょ？

ウェイランド　仕事に対してはちゃんとお給料を戴いてます。もしその額に不満なら、疾っくに辞めてます。

ステラ　（突然頬を殴られたかのように）ウェイランドさん、どうしたの。なぜそんな言い方をなさるの。わたし、何か気に障るようなこと言った？

ハーヴェスター　この人の言うことを真面に受け取る必要はありませんよ。今日は変なんです。

リコンダ　先生、軽くあしらおうとしても無駄だろう。事態は極めて重大なんだから。ステラ、実は、とても嫌なことを言わなくてはならない。きみたちの悲しみを思うと、口にしたくはないのだが、已むを得ない。

ステラ　何ですの？

リコンダ　ウェイランドさんはモーリスが心臓麻痺で亡くなったということに納得がゆかないと言うのだ。

ステラ　でも先生はそうおっしゃったわ。先生が一番ご存知だと思いますが。

ハーヴェスター　わたしはいつでも死亡証明書にサインするつもりでいます。死因についてはなんら疑問は持っていない。

リコンダ　しかしウェイランドさんは検屍を行なうべきだと考えている。

ステラ　（極めて強い調子で）駄目。そんなことは許しません。あの人は充分すぎるほど苦しみました。くだらない好奇心を満足させるためにあの人のからだを切り刻むなんて許しません。絶対許しません。

リコンダ　検屍解剖のためには家族の同意が必要だ。

ウェイランド　あるいは検屍官の。

ステラ　この人、何を言ってるの？

リコンダ　きみが同意しないなら、然るべき所に行って、先程先生とわたしに語ったことを繰り返すと言うんだ。

ステラ　何を？　この人、何て言ったんです？

リコンダ　ウェイランドさん、自分の口から言いたいかね？

ウェイランド　（冷たく、ほとんど無礼と言ってもいい調子で）別に。あなたがそうしてくださることに全く異存はありません。

ハーヴェスター　（ウェイランドに）本当にこんなことを続けるつもりなのかい？　きみが長官とわたしに話したことは内々のことだったんじゃないのかね。もう少し考えた方がいい。このまま続ければ、事態は我々だけでは解決できないところまで行ってしまう。きみのその頑な態度がどんな結果を引き起こすか、どんなにご家族を傷つけるか、よーく考えてみるべきだ。

ウェイランド　わたくしは黙っているわけにはまいりません。そんなことをしたら一生自分を赦せないでしょう。

リコンダ　ウェイランドさんは、モーリスの死因は病気によるものではない、何か別の原因によるものだと言うのだ。

ステラ　本当に申し訳ありませんが、何のことかさっぱり解りません。一体他にどんな原因が考えられますの？

リコンダ　モーリスは殺されたと言うんだ。

コリンと**ステラ**は驚く。**タブレット夫人**は叫び声を上げそうになるが堪える。

ステラ　殺された？　ウェイランドさん、あなた、どうかしてるわ。

リコンダ　先生もわたしも、モーリスは誰からも愛されていたと言ったんだが。

コリン　馬鹿げてる。

ステラ　さっきはショックを受けたけど、今は笑いたい気分。ウェイランドさん、そんなこと考えるなんて、あなた、働きすぎで疲れているのよ。そうだったの、そういうわけで、わたしが一年ほど休暇を取ったらどうか、そのための費用はさしあげると言ったら、あんな変な態度をとったのね。

ウェイランド　わたしはこうなることを願ったわけではありません。ハーヴェスター先生が検屍を行なうとさえおっしゃっていたら、それが済んで、わたしの疑いが正当なものだったのかどうか判るまで、何も言う必要はなかったんです。

ハーヴェスター　「傷つけたいことは傷つけたいが、しかし拳を揮うのは躊躇う」（注2）というわけだ、呆れたもんだ。

ウェイランド　（ハーヴェスターの方を向き）先生、あなたがわたしをこんな状況に追い込んだんです。わたしは看護婦の義務として、自分の感じた疑いをお話しただけです。ところがあなたはそれを聞いたとたん、わたしに敵意を持った。

ハーヴェスター　正直なところを知りたいかね、なら、教えてやろう。きみは神経質で、ヒステリックで、馬鹿だ。わたしは長年医者をやっていて、患者がどんなに支離滅裂なことを言うか、よーく分かってる。例えば、ある女が別の女についてどんなことを言うか、そんなものをいちいち聞いてたら、やっちゃァいられない。

ウェイランド　あるいは、あなたはスキャンダルを死ぬほど怖れていらっしゃる。スキャンダルに巻き込まれるのは医者として有難いことではありませんものね。このことが新聞沙汰にでもなったら営業に差し支える。だから検屍はやりたくない。たとえ何かがあったとしてもそれを知りたくはない。違いますか？　わたしの言っていることを否定できますか？

ハーヴェスター　世間の噂になるのは歓迎しない、それは認めるよ。何しろ全財産を叩いてこの地区の営業権を手に入れたんだ。不愉快な事件に巻き込まれることは、医者としての評判という点で良い方には働かないからね。

タブレット夫人　みんな、自分の掛り付けのお医者さんはセントラルヒーティングのような存在であってほしいと願っているのよ。有能だけれど、目立たない存在。

ハーヴェスター　いいかい、わたしはもしそうすることが医者としての義務だと感じるなら、自分の利益を優先させるようなことはしない。しかし、今回は検屍を行なう必要はないと思っているし、死亡証明書にサインしてはならない理由も見つからない。

コリン　先生の評判だとか利益だとか、そんなことは今は問題じゃないでしょう。ウェイランドさんがそこまで言う以上、何か根拠があるはずだ。それを話してもらった方が良い。

リコンダ　そう、わたしもそう考えた。みんなの前で話した方が良いと。

ウェイランド　それこそがわたしの願いでした。陰でコソコソやりたくはない。

ステラ　じゃあ、話して。

ウェイランド　（リコンダに）おそらくご承知だと思いますが、モーリスさまは眠れないことがよくございまして、ハーヴェスター先生に何種類か睡眠薬を処方していただいたのですが、なかで、クロラリンが一番効くということで、最近ではもっぱらそれをお使いでした。（ハーヴェスターに）そうですね？

ハーヴェスター　そのとおり。クロラリンは新しい薬で、錠剤なのでそれまで使っていた液体のクロラールより扱いやすい。わたしは薬に依存することの危険性を充分に説明し、わたし、もしくは看護婦の許可なしには飲まないようにと言っておいた。

ウェイランド　モーリスさまは必ずわたしの許可をお求めになりました。

ハーヴェスター　そうだろう。モーリスは物分りが良かったから、ことの重大さは解っていた。それに自制心も強かった。

ウェイランド　先生が昨夜わたしに与えた指示を、ここで繰り返していただけますか。
ハーヴェスター　（リコンダに）モーリスは大分昂奮しているようでしたから、ウェイランドさんにクロラリンを一錠用意しておくように頼んで、モーリスには夜中に目が覚めて眠れなかったら飲むようにと言っておきました。ベッドに入れば三十分やそこらはうとうとできるんでしょうが、その後もう一度眠りにつくのは難しいですからね。
ウェイランド　わたしは一錠をコップ半分の水に溶かしてベッドの横に置きました。その時、瓶の中にクロラリンは五錠しか残っていませんでした。また注文しなくては、と思ったのを憶えています。今朝、瓶は空でした。
ステラ　（困惑の表情で）変ね。
ウェイランド　ええ、変です。とても。
ハーヴェスター　どうしてそれに気づいたんだ？
ウェイランド　お部屋を片付けていたんです。お薬や包帯などで散らかっていましたから。
ステラ　（ハーヴェスターに）五錠は致死量なんですか？
ウェイランド　六錠です。わたしが溶かしておいた分もあります。
ハーヴェスター　ええ、間違いなく致死量です。
ステラ　信じられない。きっと誰かが、自分が使うために持って行ったのよ。
コリン　本当に本当なんだね？――昨夜は五錠あったというのは。
ウェイランド　はい、確かです。もし誰かが自分のために持って行ったとしたら、それはわたしが部

屋にさがった後です。
ステラ　でもその後モーリスの部屋に入った人はいなくてよ、わたし以外は。わたしはおやすみを言いにあの人の部屋に入った。
リコンダ　他に誰も入らなかったとどうして判るのかな。
ステラ　だって、他に誰がいて？　コリンとおかあさまだけよ。
リコンダ　（タブレット夫人に）ミリー、きみはわたしが帰った後、二階にさがったよね。
タブレット夫人　あたし、とても疲れていたの。（微笑みの影のようなものを浮かべて）みんながベーコンサンドを食べ終わるのを待っていなくちゃならない理由はないでしょ？
リコンダ　コリン、きみは昨夜モーリスの部屋には入らなかったよな。
コリン　ええ。どうしてぼくが？　ぼくは睡眠薬なんかなくても充分寝られます。
ステラ　まさか、わたしが取ったなんて思ってるんじゃないでしょうね、ウェイランドさん。
ハーヴェスター　もしそうだとしたら、残った四錠は今返してもらえるわけだし、もし全部飲んだんなら、今そこにそうやって立ってるなんて出来っこありません。
ウェイランド　でも、クロラリンが五錠なくなったことは確かです。どこに行ったんでしょう。
ハーヴェスター　誰か悪意を持った者が我々を困らせてやろうと思って持ち去ったということは考えられる。
ウェイランド　わたしのことをおっしゃっているんですか？　わたしが皆さんを困らせて何になるというんです？　先生が何故そんな馬鹿げたことをお考えになるのか理解に苦しみます。もしわた

しが悪意で薬を隠したとすれば、どうして先生に検屍をお願いするなんてことをします？　何も出てこないと判っているのに。

コリン　今朝誰かが持って行ったということは考えられないかな？

リコンダ　誰が？

コリン　たとえばメイドだとか。

リコンダ　クロラリンはアスピリンやヴェロナールと違って、そんなにありふれた薬ではない。メイドは名前さえ聞いたことがないだろう。

ハーヴェスター　そうでしょうか。眠れないからといって睡眠薬を飲む習慣はないだろう、メイドなんだから、――そう単純に考えるのは如何なものでしょう。新聞にもそんな記事は載ってますよ。

ステラ　そのことならすぐに判るわ。モーリスの部屋を担当しているのはアリスだから、アリスに訊いてみましょう。

ウェイランド　その必要はありません。アリスはあの部屋に入るのを怖がっていました。ですから、掃除から何から全部わたしがやるから、あなたは入らなくていい、と伝えてありました。今朝アリスがあの部屋に入っていないことは確かです。

ステラ　おかあさま、わたしたちどうしたらいいんでしょう。

タブレット夫人　あなたがいいと思うようにすればいいのよ。

リコンダ　（ハーヴェスターに）有り得るのかね、死因が睡眠薬中毒だということは。

ハーヴェスター　先程も申し上げたように、わたしはモーリスの死は自然死だったということで満足

していません。

リコンダ　わたしが訊いているのはそういうことではない。

ハーヴェスター　ええ、有り得ます。しかし、そんなことは一瞬たりとも信じない。

ウェイランド　奥様、こんなことをして本当に申し訳なく思っています、言葉になりません、こんな風にお悲しみをますます深くしてしまって。奥様がどんなに悲しんでいらっしゃるか充分わかっております。それなのに、これまでのご親切に対してこんな恩知らずなことをして、……

タブレット夫人　ねえ、あなた、あたしは信じているわ、――あなたは自分が正しいと思うこと以外は言わないだろうし、しないだろうって。

ステラ　ああ、何が何だかさっぱり解らない。ショックだわ。（ウェイランドに）あなた、本当に、モーリスは睡眠薬の飲み過ぎで死んだんだと思う？

ウェイランド　（ステラの目をしっかりと見ながら、はっきりと）はい、そう思います。

ステラ　なんて怖ろしい。

ウェイランド　（なおもステラの目を見つめたまま）このことも申し上げておくべきかと思いますが、わたしはお薬がなくなっていることと同時に、グラスの底に小さなスプーン一杯分ほどの液体が残っていることにも気づきました、昨夜モーリスさまのためにお薬を溶かしたグラスの底にです。わたしはそれを捨てずに取ってあります。分析が必要だと思ったのです。

タブレット夫人　（軽くからかうように）ウェイランドさん、あなたは職業を間違えた。あなたは私立探偵になるべきだった。

リコンダ　しかし、睡眠薬が六錠も溶けていたんでは、さぞ不味かろう。
ハーヴェスター　かなり苦いでしょうね。しかし、一気に飲んでしまえば、飲み終えるまでは気づかないでしょう。
ステラ　みんな状況証拠のようだけれど、ウェイランドさんの言っていることは充分有り得るように思える。
コリン　でも、きみ、馬鹿げてるよ。一体全体誰が兄貴を殺したいなんて思うんだい？　そんなの問題にならないよ。
ステラ　それはそう。わたしの考えていたのはそういうことじゃないの。ウェイランドさんだって誰かが意図的に飲ませたと本気で考えているはずはないし。怖ろしいことだけど、もしかしたら、あの人が自分で入れて飲んだのかも。
ハーヴェスター　自殺？
ステラ　（苦悩の色を浮かべて）昨夜のあの人はいつものあの人じゃなかった。とっても変だった。あんなに神経が昂ぶっているモーリスは見たことがない。
リコンダ　何か理由を？
ステラ　（しばらく躊躇った後で）ええ。あのう、昨夜『トリスタン』を観に行ったんです。婚約した夜に一緒に観たオペラ。それで、昔のことを思い出したんじゃないかと。
リコンダ　自殺を仄めかすようなことを何か？
ステラ　いいえ。

リコンダ　以前にそういうことは？
ステラ　いいえ、一度も。そんなことは考えたこともないと思います。
リコンダ　何故きみは、モーリスが昨夜は普段と違っていたと思うのかな？
ステラ　（かなり感情を掻き立てられて）あの人、これまでしたことがなかったことをしたんです、見ているのが辛かった。あの人、泣いたんです。わたしの腕の中で、泣いたの。
ウェイランド　なぜ？　なぜなんです？
ステラ　（苛立ちを見せて）ウェイランドさん、あなたには話せないこともあるのよ。わたしたちの間で何があったかは、わたしたち二人だけの問題、他の人には関係ない。
ウェイランド　それは失礼いたしました。しかし、正直におっしゃった方があなたご自身のためになるかと思いまして。
ステラ　どういうこと？　わたしが何か隠してる、そう非難しているの？
ウェイランド　どなたも非難などしておりません。
リコンダ　ステラ、答えにくいことを敢えて訊きたくはないのだが、しかし、もしこの人の言っていることに一理あるとするなら、事情聴取が行なわれることになるだろう。検屍官は必ずきみに、モーリスが何か自殺を仄めかすようなことを言わなかったかと尋ねるだろう。
ステラ　（深く溜息を吐いて）モーリスは、事故にあった時その場で死んでいた方が良かったと言いました。でも、あの人自身のことを考えていたんじゃないんです、わたしのことを考えていたんです。

リコンダ　それは重大な発言だ。

ステラ　ああ、ウェイランドさん、どうかわたしたちに辛く当たらないで。ちょっときついことを言ったからといって、仕返ししてやろうなんて思わないで。わたし今日は神経がまいってるの。分かってくれるでしょ？　かわいそうなモーリス、あの人には生きる希望がほとんどなかった。だから、もしあの人がお薬を飲み過ぎたとしても、あなたは優しい気持をお持ちだから、何も言わないでいてくれるわよね？　検屍だとか事情聴取だとか、そんなわたしたちを苦しめるようなことはしないでほしいの。

リコンダ　問題はハーヴェスター先生が今でも死亡証明書にサインするつもりがあるかどうかということだが。

ハーヴェスター　薬に関してウェイランド看護婦が思い違いをしていることは充分に有り得ます。わたしとしてはサインしてはならない理由は見つからないと。

ウェイランド　（非常に明快に、ゆっくりと）しかし、わたくしはモーリスさまの死は自殺ではないという確信を持っております。

リコンダ　根拠は？

ウェイランド　一つには、あのグラスの底に少量の液が残っていたことです。スプーン一杯分ほどの。憶えていらっしゃいますよね、さっき申し上げましたから。わたしは、それは捨てずに取ってあって、分析してほしいとお願いしました。

リコンダ　うん。

ウェイランド　もし仮にある人間が睡眠薬自殺を企てたとしたら、全部飲み切ってしまうものではないでしょうか、一度で無理なら、何回かに分けてでも。少しでも残して万一自殺しきれなかったら尚(なお)惨めなことになる、そう考えるのが普通ではないでしょうか。特にモーリスさまのような人の場合。

コリン　それはこじつけに過ぎないような気がするな。

リコンダ　そう。わたしにも些細なことに思える。

コリン　それに、まだその液体が分析されたわけじゃないし。

リコンダ　根拠はそれだけかね？

ウェイランド　いいえ。モーリスさまはとても良(よ)い方(かた)ですから、許可なしにお薬を飲むようなことはないと信じておりましたが、それでも薬の中毒というものは怖ろしいもので、誰に関しても〝絶対に〟とは断言できません。そうですよね、ハーヴェスター先生？

ハーヴェスター　そうだ。

ウェイランド　わたしはあの方の手の届く所にお薬を置くのは賢明ではないと考えました。いっそのこと自ら命を絶ってしまおう、という誘惑に駆られないとも限らないお薬ですから。モーリスさまは時々ひどく沈んでしまわれることがございました。

ステラ　あの人が沈んでいるところなんて見たことないわ。

ウェイランド　（苦々しく）そうでしょうね。あなたは何も見ていない。

ステラ　ウェイランドさん、わたしが何をしたっていうの？　なぜそんな口の利き方をするの？　あ

なたの顔はわたしへの嫌悪で歪(ゆが)んでるわ。どういうこと？　わたしには解らない。

ウェイランド　お解りになりませんか。

ステラと**ウェイランド**は暫く睨み合っている。が、やがて**ステラ**がちょっと身を震わせ、顔を背ける。

ステラ　あなたって人が怖ろしくなってきた。五年も一緒に暮らしてきた人がこんな人だったなんて。

タブレット夫人　（宥(なだ)めるように）怖(こわ)がることなんて何にもなくってよ。自分の神経に負けちゃ駄目。

ウェイランド　（ステラに）あなたがいる時はいつも冗談を言って笑っていた、だから、暗く惨めな気持に圧倒される時があるなんて思い浮かばなかった、――そういうことですね。

ステラ　（深い同情を籠めて）ああ、かわいそうなモーリス、なぜわたしに隠そうとしたの。

ウェイランド　（凶暴な感情を抑えるように）あの方が心に掛けていらっしゃったのはただ一つ、ご自分の苦しみがあなたにとって耐え難いものにならないようにすること。どんなにおからだが苦しみを訴えようと、あなたからは隠そうとなさった。あなたが同情しないで済むように。

ステラ　怖ろしいわ、あなたからそんなことを言われるなんて。あなたの話を聞いてると、わたし、あの人に対してとっても残酷だったような気がしてくる。

ウェイランド　（話すうちに徐々に苦々しさを増しながら）あなたからはすべてが隠されなくてはならなかった。あなたが入って来そうになれば、お薬の瓶も包帯も片付けられた。何も問題はない

と思わせるために。

ステラ　あの人のために、わたし、喜んであなたがなさったのと同じことをしたわ、もしやらせてくれたなら。でもそうさせてくれなかった。わたしが病気に関わる一切の悍(おぞ)ましいことに触れないで済むように。それがあの人の強い願いだった。

タブレット夫人　そのとおりなのよ、ウェイランドさん。ステラはモーリスのために、できることはみんなしてくれたわ、そう考えてくれなくて残念だけれど。母親として、多分あたしはあなたに負けないくらいステラのことを判断できる立場にある。この子は思い遣りがあって、無私の奉仕の心を持っているわ。あたし、ステラにはひたすら称讃の念を感じていた。

ステラ　おかあさま。

タブレット夫人　あたし、いつも思うんだけど、あたしたち、誰かを助ける時には、相手が助けてほしいと思うように助けてあげるのが一番なんじゃないかしら。こう助けるべきだとこちらが思うようにじゃなくって。あたしはこの年老いた肩に要(い)りもしないショールを掛けてもらうよりは、欲しくてたまらないお化粧品のセットをプレゼントしてもらいたいと思うわ。

リコンダ　一理ありますな。如何(いかが)です、ウェイランドさん。

タブレット夫人　ステラはモーリスにとって最善のことをしてくれた。あの子が冷やかせば同じように冷やかし返してくれたし、あの子が笑えば一緒になって笑ってくれた。

ウェイランド　それに引き替え、わたしはあの方にとって何の価値もない存在だった。金で雇った看護婦に過ぎなかった。あの方は心に重くのしかかる絶望をわたしに隠そうとはしなかった。わた

しの前では、どんな外見も繕おうとはしなかった。機嫌良く見せる必要も、楽しそうに見せる必要もなかった。いくら鬱ぎ込んでもわたしが気にしないことを知っていた。喧嘩をした後あなたを傷つけてしまったと謝ったけれど、わたしが少しも傷つかないことを知っていてそうなさっていた。それが……あなたの前では、あなたを喜ばせるために、顔に真っ白なドーランを塗って、鼻を赤く染めて輪の中を飛んでいた。ああ、あなたが見ていたのは道化師の顔よ。それだけよ。わたしはあの方の、……あの方の、裸の、苦悩に苛まれた、誇り高い魂を見ていたのよ。

ステラ　（真実が解り始める。ウェイランドがモーリスに恋していたという真実が。）ウェイランドさん、何をおっしゃってるの。

ウェイランド　真実を語っているんです。……やっと。

ステラ　そう。〝真実〟ね。そう……。

リコンダ　しかし、ウェイランドさん、きみの言うことから判断すると、モーリスは自殺を考えるほど絶望的な心理状態になったことが何度もある、――そういうことじゃないのかね。昨夜モーリスが異常に神経を昂ぶらせていたことはみんな知っている。だから、もしこれが自然死でないとしたら、自らそれをもたらした、とも充分考えられるんじゃないのかね。

ウェイランド　わたくしがとりわけ用心を怠らないようにと心掛けたのは昨夜のような場合です。クロラリンは浴室の上の棚、モーリスさまの手の届かないところに仕舞ってあります。わたし自身、薬を取るためには椅子に乗らなくてはなりません。

リコンダ　人間、どうしても何かをしようと決心した時には、普通では考えられないような力を発揮して、困難を乗り越えてしまうこともある。

ウェイランド　先生にお訊きになってください、モーリスさまが部屋を横切り、浴室に入って、椅子の上に立つことが可能だったかどうか。

ハーヴェスター　下半身には全く力が入らなかったはずです。あの事故で背骨がやられて、脊椎の索状組織はずたずたでしたから。

リコンダ　浴室まで這って行くことは？

ハーヴェスター　難しいでしょうね。しかし、やってやれないことはない。

ウェイランド　では、椅子の上に立つことは？

ハーヴェスター　それは問題外だ。

リコンダ　もし浴室まで行けたとしたら、棒か何かで瓶を取ることはできたんじゃないのかな？

ハーヴェスター　まあ、ひょっとしたら。

ウェイランド　先生、どうしてそんなことを！　先生はモーリスさまが誰かの助けなしには上半身を起こすことさえできなかったのをご存知なのに。

ハーヴェスター　ウェイランド君、きみは全てを悪い方へ悪い方へ持って行きたがっているようだが、わたしは違う。

ウェイランド　では、もし万が一、瓶が取れたとして、どうやって元の場所に戻したんです？

ハーヴェスター　（苛立って）何だ彼だ言っても、我々はまだモーリスがクロラリンの飲み過ぎで死んだかどうかも判っていないんだ。

リコンダ　事態をこのまま放って置くわけにはいかんだろう。先生、わたしは調査を開始すべきだと思う。

ハーヴェスター　ええ、どうもそのようですね。今はまだ死亡証明書にサインはできない。検屍官と話合いを持たなくてはならないでしょう。

ウェイランド　申し訳ありません。

ハーヴェスター　心からそう思ってほしいもんだ。きみは、スキャンダルに巻き込まれたくないと言うわたしを自分勝手な男だと思うだろうが、わたしとしては、大金を叩いて手に入れ、七年を掛けて築いてきた仕事が滅茶々々になってしまうかも知れないんだ、まったく！　嬉しくって涙が出るよ。

リコンダ　まあまあ、そんなに酷いことにはならないさ。モーリスのご家族にはかなり辛い質問も出るだろうが、きみの医者としての評判には影響かないさ。恢復の見込みのない患者が将来を悲観して睡眠薬で自らの命を絶った、そうした話はそんなに珍しいことじゃないし、世間の耳目を集めることもない。

ハーヴェスター　まあ、それはそうですが。

リコンダ　不治の病を抱えた人間が、無意味な苦痛に耐えるよりも、静かな眠りを選ぶ。それを勇気ある行動と讃える者は多い。そうした人間は自分自身に対して、そして周りの者に対して慈悲深いとも言える。

ウェイランド　先生はわたくし同様はっきりとお判りのはずです。モーリスさまがクロラリンの飲み

過ぎで命を落とされたとしたら、ご自分でそれができたはずはない。答えは一つしかありません。それは皆さん全員判っていらっしゃる。殺人です。

ハーヴェスター　自分でできたはずがない。だからこそ、あれは自然死だったと確信しているんだ。あのくだらん薬がどうして消えたのか、今は説明できないが、何か理由があるにちがいない。

コリン　一番考えられるのは、ウェイランドさんが思い違いをしているってことかな。だって、もし誰かが五錠も薬を取ったとしたら、風邪薬でも胃薬でも何でもいいから、代りに瓶の中に入れておくと思いませんか。無くなったことに気づかれないように。

ウェイランド　人間、何もかも考えて行動するわけではありません。犯人が捕まるのは必ず何かミスをするからです。

ハーヴェスター　しかしだよ、動機もなしに人を殺すなんてことがあるのかね。これっぽっちでもモーリスの死を願っていた人間なんて、誰もいない。

ウェイランド　どうしてそれがお判りに？

ハーヴェスター　どうしてだって？　一足す一は二だ。そんなことは誰にだって判る。誰もがモーリスを愛していた。えっ、違うかね。あんなに好い青年はいなかった。

ウェイランド　モーリス夫人が赤ちゃんを身籠っていることはご存知ですか。

ステラ　（ハッとして息を呑む。）この人、悪魔よ！

コリン　（吃驚して）ステラ！

ウェイランド　昨夜モーリス夫人が気を失った時、そうではないかと疑いを持ちました。そして今朝

確信を持ちました。

ステラ　どういうこと？　わたしが夫を殺したっていうの？

リコンダ　（非常に重々しい口調で）ステラ、この人の言っていることは本当なのかね。

少しの間（ま）がある。**ステラ**は答えない。瞳に苦悶が宿っている。部屋付きのメイド、**アリス**がきびきびとした足取りで入ってきて、この場の緊張を破り、日常の世界へと一同を連れ戻す。

アリス　奥様、ご昼食のお時間ですが、もう少し後（あと）になさいますか？

タブレット夫人　もうそんな時間？　いいえ、今いただくわ。用意して。

コリン　母さん。今は食べる気にはなれませんよ。

タブレット夫人　どうして？　アリス、二人分余分にお願いね。リコンダ長官とハーヴェスター先生の分も。

アリス　かしこまりました。（アリス退場。）

コリン　母さん。食べられませんよ。一体どうして、何もなかったように食卓（テーブル）の周りに座っていられるっていうんです？

タブレット夫人　その方がいいと思うの。まだまだお互いに言わなくちゃならないことは沢山ありそうよ。三十分ばかり関係のないことを話しても別に誰にも害にはならないと思うわ。

ステラ　わたしは食べられません。ここにいさせてください。

タブレット夫人　（断固とした調子で）ステラ、あなたも来るべきよ。

ハーヴェスター　タブレット夫人、わたしはちょっと家に帰らせていただきます。なに、一口食べたらまたすぐ帰って来ますから。

タブレット夫人　そう。わかったわ。

リコンダ　ミリー、わたしも家に戻ってもいいんだが。

タブレット夫人　（不屈の笑みを浮かべて）あなたはここにいて。是非一緒に召し上がって。ウェイランドさん、あなたはどうなさる？

ウェイランド　遠慮させていただきます。

タブレット夫人　じゃあ、お部屋に何か運ばせるわ。

ウェイランド　何もいただきたくありません。

タブレット夫人　お料理を見れば食べたくなるかもしれなくってよ。

アリスがまた入ってくる。

アリス　お食事の準備が整いました。

タブレット夫人　（ステラに手を差し出して）さあ、行きましょ、ステラ。

［幕］

第三幕

場面は第二幕に同じ。三十分が経過している。

ステラが窓辺に立って庭を見つめている。**コリン**が廊下から入ってくる。**ステラ**は彼の方を向く。

コリン　ステラ。

ステラ　食事は終った？

コリン　なんとかね。母さんに断って、どんな様子か見に来たんだ。

ステラ　あたしなら大丈夫よ。

コリン　何もなかったようにあそこに座っているのは堪らなかった。どうして母さんは、あんな茶番をぼくらにやらせたんだろう。

ステラ　（肩を竦めて）あれが分別ってものかもしれない。召使が周りにいたんじゃ、口を噤んでいるしかないでしょ？　頭を冷やすにはあれが一番だったのよ。

コリン　きみは何も食べなかったけど。

ステラ　（微笑んで）あなたが二人前食べてくれたわ。

コリン　非道い男だと思っただろうね？

ステラ　いいえ、かえって気が休まったわ。あなたが小羊やグリーンピースを狼みたいに食べるのを見てたら、この悪夢が世界の全てじゃないって思えた。世界はいつもどおり廻ってる。あたしたちがどんなに苦しんでいても、バスはピカデリーを走っているし、汽車はパディントンの駅に到着して、また出発してゆくのよ。

コリン　ステラ、あれは本当なのかい？

ステラ　なにが？

コリン　あの女の言ったこと。

ステラ　赤ちゃんのこと？　もしかしたら。……ええ、本当よ。

コリン　ステラ！

ステラ　最初は確信はなかった。怖かったの。間違いかもしれないって思った。つい最近になって間違いないって思った。

コリン　どうして言ってくれなかったの。

ステラ　言いたくなかった。

コリン　そんな！　知らずにグアテマラに帰すつもりだったなんて。

ステラ　出発までに、もう残り一月しかなかった。その最後の一月を台無しにしたくなかった。あた

しが悩んでるからって、あなたまで悩む必要はないわ。

コリン　でも、どうするつもりだったんだい？

ステラ　分からない。何か逃げ道を探そうとは思ってた。でも、あなたが帰ってしまった後の方が考え易いような気がして。どうなるにしても、あなたを巻き込みたくなかったの。

コリン　どうして。

ステラ　分からない、あなたを愛してるから、ということ以外。

コリン　悩みを分かち合いたいんだ。駄目？

ステラ　女って馬鹿なのよね、男の人にあなたの赤ちゃんが出来たのよって伝える瞬間は、女にとってとても大切な瞬間なの。幸せで、ちょっと不安もあって、何か畏れ多いような気持も。相手の人には嬉しくて大騒ぎしてほしい。でも、今はあなたに喜びとか誇りを期待することはできない、当惑するだけだろうって思った。

コリン　ああ、ステラ、どんなに愛してるか、分かってるだろう？

ステラ　やめて。言わないで。あたしを困らせるようなことは言わないで。あたし、感情的にはなりたくないの。このことを話し合うんなら、できるだけ冷静に話し合いたいの。

コリン　あの恐ろしい女は今度はどんなことを言うつもりなんだろう？

ステラ　分からない。でも気にしない。……いえ、違う、本当は怖くて怖くてたまらないの。

コリン　何を言われても、あまり感情的にならないで。

ステラ　ああ、コリン、どんなことになっても、あたしの味方でいてくれるわよね。

コリン　勿論だ。誓うよ。

ハーヴェスターが庭から入ってくる。

ハーヴェスター　あれ、もう食事は終えたんですか？

ステラ　（無理に笑顔を作ろうとして）食べた風をしてもしょうがないでしょう。ちょっと一人になりたくて、この部屋に戻っていましたの。

コリン　長官と母もすぐに来ると思います。ぼくが出る時コーヒーを飲み始めたところだったから。

ハーヴェスター　ウェイランドは何処に？　あの人と二人だけで話をしたいと思って早く戻ってきたんだが。

ステラ　コリンが連れて来てくれますわ、ねっ？　部屋で食事をとっているはずだから。

コリン　諒解。（彼は出て行く。）

ハーヴェスター　きっと何もかもうまく行きますよ。

ステラ　わたしはそうは思いません。

ハーヴェスター　冷静ですね。

ステラ　大地が足下で口を開けて待っていて、天が今にも崩れ落ちようとしているんです。慌てふためいた雌鳥みたいに逃げ廻ってもしょうがないでしょう。

ハーヴェスター　ひとつ忠告させてもらえますか。

ステラ　（ほんの少し皮肉っぽく）ええ、大歓迎。従うとは保証できませんけど。

ハーヴェスター　ただ、そのう、わたしならウェイランドの機嫌を損ねないようにくれぐれも注意する、ということです。

ステラ　あの人だって、これ以上事態を悪くすることはできないでしょう。

ハーヴェスター　そうでしょうか。わたしにはどうもそうは思えない。それで、二人だけで話したいと思ったんです。ウェイランドは元々（もともと）はそんなに悪い人じゃない。それに、この三十分で少しは頭も冷えたでしょうから、さっきよりは理性的になってるんじゃないかな。

ステラ　わたしが先生なら、期待はしませんね。

ハーヴェスター　こんなに騒ぎ立てて、ウェイランドにとって何の得になるっていうんです？

ステラ　あの人、きっと、とても良心的な人なのよ。わたしへの嫌悪感と看護婦としての義務感を混同している。

ハーヴェスター　善人というのは付合いにくいものですね。

ステラ　（微笑んで）幸い、善人はそれほど多くはいませんわ。だから、わたしたちその他大勢に迷惑がかかることもそんなにはない。

ハーヴェスター　ウェイランドはあなたに敵意を抱（いだ）いていますね、間違いなく。

ステラ　先生、ひとつお訊きしたいことがあるのですが。

ハーヴェスター　答えられることなら何なりと。

ステラ　モーリスは気づいていたと思いますか？　その……わたしのからだの具合について。

ハーヴェスター　そうは思いませんね。

ステラ　よかった。わたし、耐えられなかったんです。このままゆけばそのうちお腹（なか）が大きくなって、あの人も子供の父親は誰かと訊かざるをえなくなる。そんな状態にわたしを追い込むよりは自ら命を絶とう、――そう考えたんじゃないかって。そういう人なんですもの。

ハーヴェスター　死因がクロラリンの飲み過ぎだとするなら、自殺ということはあり得ない。自分で薬を取ることはできなかったんだから。

ステラ　でも、じゃあ一体誰が？

ハーヴェスター　それが問題なんです、そうでしょう？

ステラ　とんでもない考えが次から次へと頭に浮かんでくるんです。でも、どれもこれも信じられないものばかりで。

ハーヴェスター　分かります。

ステラ　どうしてあの人はわたしを放っておいてくれないんでしょう、一人きりでいたいのに。わたし、悲しみで胸が張り裂けそう。後悔の念でいっぱい。自分が恥ずかしい。先生は昔のモーリスをご存じじゃありませんよね。あの人、それは素敵だった。こんな恐ろしいことになる前、わたし、あの人の部屋で泣いていたんです。あの人のためだけじゃない。自分のためにも。その昔あの人に夢中だったことを思い出して。ああ、人が死ぬって何て残酷なの。

ハーヴェスター　分かります。医者をやっていると人の死には何度も向き合いますが、いつも何とも言えない無力感に襲われる。人間、死ねば何もかも終わってしまう。

ステラ　わたしは、死がすべての終りだとは思いません。それじゃあまりにも不公平です。あの人は信じていました、人間は生まれ変わるんだって。それが間違いだってどうして言えます？　こんなこと言ったら、馬鹿げてる、幼稚だってお笑いになるかもしれませんが、わたし、あの人の勇敢な魂がこのお腹の赤ちゃんの中に移り住んでいるような、不思議な、神秘的な気持がするんです。この子に生まれ変わることで、あの人はわたしの罪を赦してくれている。本来あの人のものだったはずの人生を、この新しい生命（いのち）を借りて生きている。

ハーヴェスター　或ることはそれを正しいとひたすら信じることによって真理となる、そう考える人もいます。そうした問題に結論を下すなんてことはわたしにはできない。

ドアが開いて**コリン**が入ってくる。そのすぐ後に**ウェイランド看護婦**が続く。

コリン　さあ、お連れしましたよ。

ステラ　ああ、ウェイランドさん、先生があなたと二人だけでお話がしたいって。わたしとコリンは庭に出ていますわ。

ウェイランド　ご親切には感謝しますが、でも、先生と内緒でお話するようなことは何もありませんし、先生のおっしゃることを他（ほか）の方々がいらっしゃらないところでお聞きしたくもありません。裏取引はしたくないんです。

ハーヴェスター　なにも裏取引をしようなんてつもりはない。

ウェイランド　先生が何をおっしゃりたいかは判っています。このお屋敷の方々はどなたもこれまでわたしを親切に、寛大に扱ってくださった。これからも更に親切に、更に寛大に扱ってくれるだろう。けれど、もしスキャンダルを起こすというなら、この先色々と不愉快な目に遭うことを覚悟しなくてはならないし、次の仕事を見つけるのにも苦労するだろう。反対に、もし大人しくしていれば、日本に行って楽しい時を過ごせる、――そうおっしゃりたいのでしょう。嫌です。大人しくしているつもりはありません。

ステラ　（冷静に）決心は固いようね。

ハーヴェスター　しかし、なにも、五分だけ話を聞いても傷つくことはないだろう。

ステラ　先生、それはわたしがお断りします。わたしのためにウェイランドさんに何かをお願いすることは、わたしが許しません。

コリン　母さんと長官が来たようだ。

ハーヴェスター　じゃあ、どっちみち、もう時間がないというわけだ。

コリンはドアのところに行き、二人のためにドアを開ける。**タブレット夫人**と**リコンダ長官**が入ってくる。

タブレット夫人　お待たせした？　ウェイランドさん、食べたいものはみんな揃っていましたか？

ウェイランド　ええ、すべて。ありがとうございました、奥様。

タブレット夫人　お掛けになったら？　立っていても疲れるだけでしょう。
ウェイランド　（座りながら）ありがとうございます。
タブレット夫人　もう充分お話合いはなさった？
ハーヴェスター　いま来たばかりでして。
タブレット夫人　どうやら、あたしたちの命運はウェイランドさんが握っているようね。ウェイランドさん、何か決心なさった？
ウェイランド　奥様、わたしは自分が義務だと思うことをするだけです。
タブレット夫人　そうよね。あたしたちは誰も皆んな自分の義務を果たすべきだわ。でも、そうしながら他の人から悪く思われないで済ますってことは、なかなか難しいことだと思わない？
ウェイランド　奥様、昼食の前にリコンダ長官はモーリス夫人に一つ質問をなさいました。夫人はまだそれにお答えになっていません。
リコンダ　（ステラに）ご無礼をお赦しいただきたい。この人は先刻、あなたが身籠っていると言った。そしてわたしはそれは本当かと尋ねた。
ステラ　本当です。
リコンダ　（当惑と闘いながら）いやァ、困りましたな。わたしは、このような私的なことに口を挟む立場にないことは重々承知しているが、……
ステラ　長官、お気になさらないでください。あなたが親切そのものの方でいらっしゃることは分かっています。おかあさまとは旧いお友達だし、モーリスとコリンの子供時代も知っていらっしゃ

います。
リコンダ　しかし、そうではあっても、次に必然的に浮び上がってくる質問をするのが難しいことは、お分かりいただけるものと。
ステラ　お尋ねにならなくてもお答えいたしますわ。モーリスがこのお腹の子の父親であることは勿論ありえません。あの事故の後は、名前だけの夫でしたから。
コリン　（ステラに近づき、彼女の肩に腕を廻して）長官、ぼくが父親です。
ウェイランド　（吃驚して）あなたが？
タブレット夫人　（幾分皮肉っぽく）ウェイランドさん、まさか、コリンとステラが愛し合っているのを、あなたのその鋭い目が見逃していたなんて言うんじゃないでしょう？
ステラ　（少し怯えたように息を呑んで）知っていらっしゃったんですか？
タブレット夫人　確かにあたしたち老人は歳を取るにつれて馬鹿になってゆくけれど、この頃の若い人たちが考えたがるほど馬鹿になってゆくわけじゃないわ。
ステラ　ああ、おかあさま。おかあさまがわたしのことをどんな風にお考えになったか。
タブレット夫人　（感情を込めずに）気になる？
ステラ　……わたしは、本来なら自分を恥じて当然なのでしょう。でも、わたしは自分に正直でありたいと思います。後悔している風はしたくありません。後悔していないのですから。わたしはコリンを愛しています。それはどうしようもないことなのです。雨が空から落ちるのを止められないように、木々がいっせいに芽吹くのを止められないように。わたしはコリンの子を宿したこと

を誇りに感じています。

ウェイランド　あなたは恥知らずよ。

ステラ　（タブレット夫人に）けれど、おかあさまがモーリスはわたしから非道い仕打ちを受けたとお考えになったとしても、それは当然です。あの人は今は苦しみを感じることのない世界にいる。でも、おかあさまは……。わたしはおかあさまを苦しめてしまったことを深く後悔しています、深く。弁解の余地はありません。

タブレット夫人　ねえ、あなた、昨夜あたしの言ったこと憶えてない？　あたし、あなたがあの子のためにしてくれたこと全てに感謝しているって。あれを行き当りばったりに言ったと思って？　あたしには判っていたのよ、あなたのお腹に赤ちゃんがいることも、父親がコリンだってことも。

コリン　母さん、ぼくは、恥ずかしいことをしてしまった。

ステラ　コリン、あなたが悪いんじゃないわ。（タブレット夫人に）男の人に自分を愛させたくないと思ったら、そうすることは女にとって難しいことではありません。同じ家に何ヶ月も暮らしているのだから、普通ならコリンはわたしを女ではなく嫂に過ぎないと思うようになる、もしわたしにそうするつもりがあれば。でも、わたしはそうはしなかった。コリンがわたしを愛するのを止めようとはしなかった。コリンに愛してほしかった。恥知らずにも、わたしがこの人に、わたしを愛するよう仕向けたんです。

コリン　ああ、ステラ、きみを愛さないでいるなんてできない。愛したことを恥ずかしいとも思わない。ぼくが恥ずかしく思うのは、きみを愛していると分かった時、すぐにグアテマラに帰ってしまわなかったことだ。

タブレット夫人　その時はもう遅すぎたってことね？

コリン　憶えてますか？――ぼくたちがまだ小さくて、インドにいた時、自分の前世のことを記憶している子供たちの話をよく聞かされた。そうした子供は、村の人間の誰が誰か、前に自分のものだったものがどれかを正確に言えるし、初めて行く所でも、以前何度も出掛けたことがあるかのように、道に迷うことなく行ける。ステラを愛しているのが分かった時、ぼくにはそれと同じような感覚があった。ぼくはずっと昔からこの人を求めていたんだ、この人の愛は自分にとってとても懐かしいものだって。

ステラ　おかあさま、おかあさまがわたしのことをどんな風にお考えになろうと、どんなに悪くお思いになろうと、これだけは信じてほしいんです、――わたしがコリンにこの身を与えたのは、一時の気まぐれを満足させたかったからではない。

タブレット夫人　ええ、分かっていますよ。あなたは、愛するように仕向けたのは自分だと言った。真実コリンを愛していなかったら、どうしてそんなことが言えて？　あなたは、自分が仕向けなかったらコリンはあなたを愛することはなかったと思い込んでいるようだけど、この奇跡が起こったのは、コリンもあなたを愛していたからなのよ。恋する者はいつも自分に自信が持てない。激しい恋に確信を持てる人間は滅多にいないの。誰にでも確信が持てるのは、相手への優しい気持から生まれる愛情だけ。

ステラ　わたしを捉えてしまったこの狂おしい気持に抵抗しなかったとはお考えにならないでくださ

い。わたしは何度も自分に言い聞かせました、――モーリスの深い愛情に応える途は一つしかない、それはあの人に誠実に仕え、貞節を守ることだって。

タブレット夫人　そうでしょうとも。

ステラ　モーリスは、予想もできなかった事故に巻き込まれて、からだを動かすこともできずにベッドに括り付けられている。だから、もしあの人を裏切るなら、わたしは獣にも劣るものになってしまう。わたしはコリンを遠ざけるようにしました。コリンに対して、ぞんざいに、冷たく、皮肉たっぷりに当たるようにしました。でも、そうすると、この人の瞳が悲しそうに、惨めそうに曇るんです。心が張り裂けそうだった。わたしはコリンを遠ざけるためにあらゆることをしました、――一つを除いて。アメリカに帰るようにとは言わなかった。それはできなかった。それだけは。わたしは、おかあさまのため、モーリスのために、コリンはここに居た方が好いのだという風をしました。おかあさまはコリンと長いこと会っていなかったのだから、モーリスもコリンが来てとても喜んでいるのだから、と。

タブレット夫人　確かにそうね。あたしはコリンとは長いこと会っていなかったし、モーリスもコリンが来てとても喜んでいたわ。

ウェイランド　（激怒して）奥様。奥様の気持が解りません。奥様はわざわざ嫁のために言い訳を見つけてやっている。何が起こっているのか判っていたのなら、なぜ止めなかったんです。

タブレット夫人　ウェイランドさん、あなたにはショックかも知れないけれど、なるたけ上品に言うようにするから、聞いてくれる？　こうした問題は、偽善的で気取り屋のあたしたちイギリス人

が、あからさまに語るのは品のないことだと決めつけているから、上品に言うのはなかなか難しいの。ステラは若くて健康な、普通の女性よ。だからこの子が、あたしがこの子ぐらいだったとき持っていた本能を持っていないなんて、あたしには想像できないの。性欲は食欲と同じように極普通の本能だわ。眠くて眠くてどうしようもないのと同じで、自然の欲求なのよ。どうしてその欲求が満たされないままでいなくちゃいけないの？

ウェイランド　（嫌悪感に少し身を震わせて）どうやら現代は性に取り憑かれた時代みたいですね。他に何かないんですか。確かに、食べなければ生きていけない、眠らなければ生きていけない。でも、性欲を満たさなくたって生きていけます。

ハーヴェスター　しかしその代償として、情緒不安定になったり、性格が捻くれたり、不健全な感情を抱いたりすることもある。

タブレット夫人　あの事故があって、あの子とステラがもう二度と夫婦の関係が持てなくなったと判った時、あたし、ステラはこの先その偽りの関係を保っていけるのかしらって思った。二人は健康な若者としてお互いを愛していたはずよ。二人の愛は深くて情熱的な愛だった。でも、根本は、性的な関係に基づいたものよ。確かに、時間が経てば、その愛はもっと精神的な性格を帯びるようになっていったのかも知れない。人生に付き物の色んな試練を一緒に乗り越えることで相手に対する優しい気持だとか信頼だとかが生まれて、薄らいでゆく情熱の炎に代わる明かりとして、それが育っていったのかも知れない。でも二人にはそうした時間はなかった。

ウェイランド　（ステラに、皮肉を込めて）お二人の結婚生活はどのくらい続いたんです？

ステラ　あの事故が起こったのは結婚して一年ほど経った時だったわ。

ウェイランド　一年。まるまる一年。

タブレット夫人　あの苦しみの中から、モーリスには新しい愛の形が生まれた。ステラを渇望し、ステラに頼り切る愛情。でも、あたしにはステラがその愛にどれ程の間満足していられるか判らなかった。

ウェイランド　（苦々しい口調で）奥様は人間性というものに信頼を置いている、と言える人は一人もいないでしょうね。

タブレット夫人　あたしは大きな信頼を置いているわ。ただし、あたしの経験がここまでなら大丈夫と教えてくれた範囲での信頼だけど。あたしには分かってた、ステラのあの子に対する同情は永遠になくならないだろうって。

ステラ　ああ、永遠になくなりませんわ。かわいそうなモーリス！

タブレット夫人　その同情が余りにも大きくて、ステラはそれを愛だと勘違いしていたのよ。あたしはステラがその勘違いに気づかないでいてくれることを祈った。モーリスにとってはステラが世界の全てだったんですもの。世界の全て。あの子の命を何とかして救おうとしている間は簡単だった。でも、一命を取り留めた時、下半身不随になって永遠にその状態が続くだろうと判った時、あたし、恐怖に襲われた。いつかステラがこの生活に耐えられなくなる時が来る、モーリスが与えられるのは惨めな生活だけだってことが判る時が来るだろうって。ステラが出て行きたいと言えば、あたしたちにそれを止める権利はない。でも、もし出て行ってしまったら、あの子は死んでしまうだろうって。

ステラ　たとえそうなったとしても、わたしは出て行ったりはしませんでしたわ。そんなことは考えたこともありません。

タブレット夫人　あたしは、精神的なストレスが段々とステラを苦しめ始めているのに気がついた。これまでどおり優しくて親切だったけれど、でもそれは努力の結果だった。ねえ、あたしたちが何か善いことをしたとして、無理にそうしているとしたら、極自然にそれをしているのじゃなかったら、一体どんな価値があるというの？　お花が好い香りを放つのは決して努力の結果じゃないわ。

ウェイランド　善行は無意識になされなければ善行ではない、と？　そんなの聞いたことありません。

タブレット夫人　そうは言ってないわ。ただね、もし誰かが苦労して善行を積んだとしたら、その御利益は、それをしてもらった人より、それを行なった人のところにゆくような気がするの。だから、汝与へらるるより寧ろ与へよ、神の祝福は汝のものならむって言われるんじゃない？（注3）

ウェイランド　奥様のことが解らなくなってきました。奥様のおっしゃっていることは、あんまりにも皮肉っぽくて、不愉快です。

タブレット夫人　じゃあ、残念だけど、今から言うことはもっと皮肉っぽくて不愉快に聞こえると思うわ。あたし、気がついてみたら半ば本気で、ステラは愛人を持つべきだって考えてたの。

ウェイランド　（恐怖に震えて）奥様、何てことを！

タブレット夫人　ステラがモーリスと一緒にいてくれさえすれば、あたし、どんなことにも喜んで目

を瞑るつもりでいた。あたしが望んだのは、ステラがあの子に、優しく、親切に、思い遣りをもって接してくれることだけ。他のことはどうでもよかった。

ウェイランド　（途切れがちな口調で）奥様、わたしは奥様に対して深い尊敬の念を抱いてきました。称讃していたと言ってもいい。自分も歳を取ったら奥様のような人になりたいと思っていました。なのに……。

タブレット夫人　コリンが戻ってきてから暫くして、この子がステラを愛しているのが判った。そして、ステラもコリンを。でも、あたしは何もしなかった。殆ど必然的に起こる結果についてもそれを食い止めようとはしなかった。自分に向かって口に出してこそ言わなかったけれど――そんなことをしたらわたし自身とてもショックだったでしょうね――でも、心の中では、これはモーリスにとって有難いことなんだ、これでステラはこの家に留まってくれる、哀れみや同情よりも強い絆でステラはこの家に結びつけられているって感じた。

リコンダ　それがどんなに危うい立場に二人を置くことになるか、お考えにはならなかったんですか。

タブレット夫人　そんなことは気にしなかった。あたしの考えていたのはモーリスのことだけ。二人がまだ小さかった頃は、あたし、二人を平等に愛してたと思う。でもあの事故の後は、あたしの心にあったのはモーリスだけ。あの子がすべてだった。あの子のためならコリンもステラも犠牲にして構わない……。（訴えるような小さな身振りをステラに向かってして）きっとこの子たちは赦してくれると思う。

ステラ　赦すだなんて、そんな、……わたしに何か赦すものでもあるような……。

ウェイランド　わたしがショックを受けたと申し上げても、奥様はきっとお笑いになるだけでしょうが、言わせてください。わたしはショックを受けました。言葉にできないほど深いショックを受けました。

タブレット夫人　きっとそうなるだろうと思ったわ。

ウェイランド　奥様だけは卑しいことを考えるような方ではないと信じていました。それは信仰と言ってもいい。そのためなら焚の刑になっても構わないほどの。本当に奥様は、ご自分の嫁が同じ屋根の下で他の男と関係を持っても平気なのですか。腸が煮えくり返ることはないのですか。

タブレット夫人　あたしの胃腸は丈夫に出来てるみたいよ。長いこと外国で暮らしてきたせいか、あたし、自分の持っている善悪の基準が唯一のものだとは考えられなくなってしまったみたい。この頃はみんな解ってきたようだけど、道徳って、いつの時代、どこの地域でも同じだってわけじゃない。例えば、イギリスでは正しいと思われていることが、インドでは間違っていると信じられている。

リコンダ　あるいは、その逆も。

タブレット夫人　なら、同じ時代、同じ国でも、人によって道徳観が違ってもおかしくない、何故そう考えないのかしら。もちろん、お金持にはお金持の道徳があって、貧しい人には貧しい人の道徳があるなんて、そこまで言うつもりはない。それは疑わしいと思う。でも、若い人には若い人の、年寄りには年寄りの道徳――規範ってものがあってもいい、それは確かだと思うの。だから、こと性に関した問題では、もし仮にその規範を作ったのが、若かった頃の活力や情熱を疾うに失

ってしまった人じゃなくって、若い人だったとしたら、今とは随分違ったものになっていたんじゃないかって、そう思うの。自然が人間の遺伝子の中に組み込んだ本能に若い人が従ったとして、そんなに悪いことかしらって。

ウェイランド　その結果生じるかもしれないことはお考えにならなかったんですか。

タブレット夫人　赤ちゃんのこと？　あたしには、そのことがまさにステラの罪のなさを証明しているように思えるの。身持ちの悪い、擦れ枯らしの女性なら、どうすればそういう結果を招かないで済むか知ってたと思うの。

ウェイランド　（嘲弄するように）モーリスさまの死は、夫人が見苦しい破目に陥入る寸前にもたらされました。渡りに舟とはこのことですね。奥様もそのことはお認めになるでしょう。

ステラ　何てことを！　なんて酷いこと言うの！

リコンダ　（厳しい調子で）ウェイランド君、注意したまえ。それはステラに対する告発以外の何ものでもない。

ウェイランド　誰かを告発したいわけではありません。最初から申し上げているように、モーリスさまの死には腑に落ちない点がある、だから検屍を行ってほしい、それだけです。どうかその点はお認めください。それはわたしの権利であり、義務です。そうですよね、ハーヴェスター先生。

ハーヴェスター　それはそうだが……。

ウェイランド　こうなったのはあなたの所為なんです。先生は、誰がモーリス・タブレットを殺す動機を持っているのかとお尋ねになった。だからわたくしは、自分を弁護するために、モーリス夫

人は妊娠している、モーリスさまがその父親では有り得ないと申し上げざるを得なかったんです。

ステラ　あなたはこれは義務だと言うけれど、本当は、それより、わたしに対する憎しみからやっているんじゃない？　違う？

ウェイランド　（嘲笑うように）どうしてわたしがあなたを憎んだりします？　わたしはあなたを軽蔑しているだけです。

ステラ　わたしを憎むのは、あなたがモーリスに恋していたからよ。

ウェイランド　（荒々しく）わたしが？　何を言ってるんです。侮辱するつもり？　よくもそんなことを！

ステラ　（冷たく）今朝の様子で分かったわ。これまでも時々、あなたが、普通看護婦さんが患者に対して持つ好意以上のものをモーリスに持っているんじゃないかしらとは思った。そのことでよくあの人を揶揄ったりもした。でも今日の朝まではそんなに真剣なものだとは気がつかなかった。今朝のあなたの言葉、あれを聞けば、はっきりしてるわ。あなたは心底あの人に恋していたのよ。

ウェイランド　（挑むように）で、もしそうだったら？　それで？

ステラ　何も。ただ、ショックを受けたのはわたしの方だってこと。悍ましくて、吐き気がしたわ。

ウェイランド　（次第に感情的になりながら）ええ、わたしはあの方を愛していました。あなたの愛が衰えてゆくのを目にするにつれ、わたしの愛は募っていった。おひとりでは何もできず、余りにわたしに頼っていらっしゃったから。この腕の中ではまるで子供のようだったから。わたしは、あの方を愛していることを決して表に出しませんでした。そんなことをするくらいなら死んだ方

がましだった。でも、いくら隠していても、本当は分かっていらっしゃるのではないかと、恥ずかしさを感じることもあった。けれど、分かっていたとしても、あの方はわたしを理解し、わたしを哀れんでいてくださったはずです。誰かに恋い焦がれながら相手から愛の返ってこない辛さを知っていらっしゃったのだから。あの方にとって、わたしの愛は無に等しかった。あなたへの愛以外のものが占める余地はなかった。それなのに、あなたにとっては、あの方の愛はまったく無用のものだった。あの方はパンを求めたのに、あなたが与えたのは石ころだった。（注4）自分は親切に、思い遣りを持って接したと思いこんでいるけれど、でも、もしわたしが愛したようにあの方を愛していれば、あなたがしていることなんて、どれもこれも何の価値もないものだと分かったはずよ。わたしは、所詮何の意味も持たないと分かっていても、あの方を幸せにする方法を何十、何百と心に思い描いた。ではあなたは、と言えば、そういうことを考えるだけの愛すら持っていなかった。

ステラ　ウェイランドさん、わたしの言ったこと、本当にごめんなさい。わたしが馬鹿だった。非道いことを言ってしまったわ。どんな形の愛でも、そこには何か美しいものがあると思う。あなたが夫に与えてくださった愛に感謝しています。この感謝の気持を受け取ってほしいの。

ウェイランド　（荒々しく）いまさら感謝だなんて、なんて厚かましい。

ステラ　残念です、あなたがそんな風に……。ええ、あなたの言うとおり、わたしはモーリスを愛してはいなかった、少なくとも女が男を愛するという意味では。わたしはそのことを強く意識していた。だから自分を責めた。あの人に対して感じられないんですもの、かつては感じないではい

られなかった愛を。なんて恩知らず、なんて冷たい人間なんだろうって思った。わたしにとってあの人はとても親しい友人、――それ以上のものではなかった。心から気の毒に思わずにはいられない友人。

ウェイランド　あの方はあなたから憐れみをかけてほしかった、そうお思いで？

ステラ　そうは思わない、それは分かってる。でも、それ以上わたしに何ができて？　〝憐れみと愛とは紙一重〟と言ったのは誰かしら。本当はその間には天と地ほどの違いがあるのに。

ウェイランド　（怒りに熱くなって）ええ、あの忌まわしい性欲というものが。

ステラ　じゃあ、あなたの愛にはそうした欲望はまったく無いって信じてるわけ？　モーリスへのあなたの気持に気づいた時わたしが嫌悪に震えたのは、そこに、障害を持った人間に対する異常な、病的な性欲を感じたからよ。

ウェイランド　（激情に駆られて）何てことを！　そんなことは絶対ない。わたしの愛は、純粋で精神的な愛だった、神様に対する愛と同じように。自分のことは何も考えていなかった。ただ同情と、キリスト教徒としての慈愛。あの方にお仕えし、お世話することが許される、――わたしが願ったのはそれだけだった。あの方の痩せ細ったおからだをタオルで拭き、髭を剃る時には鏡を持っていてさしあげる、それだけで充分報われていた。あの方の唇に触れたことなど一度もない、……お亡くなりになって冷たくなるまでは。ああ、わたしはすべてを失った、この人生を愛おしいものにしてくれていたすべてのものを。あなたにとってあの方は何だったというの？　奥様にとってどういう存在だったというの？　わたしにとってあの方は、……あの方は、わたしの子供、

わたしの友人、わたしの恋人、わたしの神様だったのよ。その方を、あなたが殺したのよ！

ステラ　嘘よ！

リコンダ　ウェイランド君、きみにそんなことを言う権利はない。

ウェイランド　（我を忘れて）嘘じゃない！　本当のことよ！　それはあなたにだって分かってる。

リコンダ　（苛立ちを抑えきれず）わたしには何も分かっていない。分かっているのは、ただ、きみが昂奮に駆られて、何の証拠もないことを喚いているということだけだ。

ステラ　（自らに忍耐を課すように、肩を竦めて）ねえ、わたしがモーリスを殺すなんて有り得ないわ、それはわたしがサーカスの綱渡りができないのと同じ。だって、そうでしょう？――わたしはこの家を出ていこうと思えばいつだって出ていけたんだし、そうしたからといって誰も非難はできなかったんだから。

ウェイランド　でも、その後どうやって生きていけたというんです。あなたはお金は一文も持っていない。何百回となくモーリスさまに言ってましたよね、――自分はお行儀よくしていなくちゃならないの、何故ってあなただけが自分の生活の糧なんですもの、って。

ステラ　些細な冗談だけど、ああした、自分が弱々しく見える冗談はあまり言うべきじゃなかったわね。働こうと思えばわたしだって働けたんですもの。

ウェイランド　（軽蔑するように）あなたが！

ステラ　働いている女性って、自分がやっていることは他の女にはできっこない、そんなことができたら奇跡だって考えたがるようね。わたし、働くとしても、あなたのように看護婦になる必要は

なかったと思う。だって、帽子のデザインをするとか、新しいお化粧品を考え出すとか、そのくらいならわたしにもできたでしょうから。

ウェイランド　よくもそんなくだらない冗談を言ってられますね、今この時に。

ステラ　でも、先に冗談を始めたのはあなたでしょ？――わたしが夫に毒を盛ったっていう冗談を。

ウェイランド　生活のために働くってことがどんなことか、お分かりなんですか。疲れていたり、気分がすぐれないことだってある、でもやらなくちゃならない、仕事だから、――そういうことがお分かりで？　仕事に行きたくない、他の女のように楽しみたい、――そういう気持が分かるっていうんですか？　あなたはこれまでずっと、可愛がられ、甘やかされて、やりたいようにやらせてもらってきたんです。しかもお腹には赤ん坊がいる。そんな人間が、どうして働けたっていうんです。

コリン　ウェイランドさん、いくら何でも言い過ぎじゃないですか。このまま黙ってステラを侮辱させておくわけにはいかない。ひどすぎる。

ステラ　わたしにはコリンがいるわ。この人はわたしを見捨てるような人じゃない。

コリン　勿論。

ウェイランド　でも、結婚に漕ぎ着けるまでには、それこそうんざりするほど厄介な目に遭わなくちゃならなかったでしょうよ。お腹の子供のことをモーリスさまに告白しなくてはならないし、離婚裁判所に出頭もしなくちゃならない。あまり楽しい裁判ではなかったでしょうね。

ステラ　考えただけでも怖ろしいわ。

ウェイランド　（コリンの方を指さして）この人がそうしたことに耐えられたと思います？　それだけの愛を持っているかしら。みっともない立場に追い込まれるにつれて、あなたを憎むようになったなんてことはないかしら。男って繊細なのよ。女より繊細。スキャンダルを恐れるのは、むしろ男の方だわ。

ステラ　じゃあ、わたしは典型的な女じゃないのかもしれないわね。わたしもスキャンダルは好まない。

ウェイランド　（ありったけの軽蔑を込めて）そんなこと、わたしに向かってわざわざ言う必要はないでしょう。大体、何故わたしがこうやって言いたい放題言うのを許しておくんです？　最後にはわたしを言い包められる、金で解決できる、――そう思ってるからじゃないですか。あなたのお友達のこの二人の紳士だって、わたしを憎んでいるのに、何故追い出そうとしないんです？　わたしを怖がってる、スキャンダルを恐れている。世間の噂になるのを恐れているからじゃないんですか。そうでしょう！

ステラ　ええ、多分。

ウェイランド　それに、あなたが恐れてるのはスキャンダルだけじゃない。自分の首に縄が掛けられるのを恐れてるのよ。

ステラ　違う。それは違う。

ウェイランド　状況は絶望的だった。そこから逃れる途は一つしかなかった。裏切られたことが判れば、あなたの残酷さが判れば、あの方の胸は張り裂けたにちがいない。あなたもあの方をそんな

状況に追い込むわけにはいかなかった。それぐらいなら殺してしまった方がましだった。

ステラ　ウェイランドさん、あなたはわたしを五年間見てきた。どうして、わたしにそんな非道いことができると？

ウェイランド　モーリスさまは、寝たきりで、ご自分を守ることはできなかったけれど、あなたを信頼し、あなたを愛していた。もしあなたに少しでも真面な感情があれば、他の男と関係を持つなんてことはできなかったはずです。そして、あの方を平気で裏切ることができたということは、殺すこともできたということです。

タブレット夫人　（微かに笑みを浮かべて）あなた、誤った俗説を信じ過ぎてやしない？――善き女性とは貞節な女性だっていう。それって、とっても狭い考えだと思わない？　貞節は、そりゃア素晴しい美徳よ、でもそれが美徳のすべてじゃない。親切であること、勇敢なこと、他人に対して思い遣りを持つことだって大切な美徳だわ。それに、ユーモアと常識を付け加えたっていい。

ウェイランド　奥様は息子さんを裏切った女を弁護なさろうっておっしゃるんですか？

タブレット夫人　弁護じゃない。赦そうというの。ステラはモーリスのために、できることはすべてやってくれた。他のことはこの子の力では無理だったのよ。

ウェイランド　ああ、そういうことですか、奥様がどうお考えか、よーく解ったような気がします。要は、この世に大して重要なものはない。罪深いだけでは罪ではないし、美徳だってそんな大した価値はない、――そういうことなんですね。

タブレット夫人　あたし自身のことを少し話してもいい？　あたし、まだ若かった頃、――と言って

も結婚して二人の子供も生まれた後だけど、インドで、夫が担当していた地方の警察署長に恋してしまったの。彼もあたしを深く愛してくれた。

リコンダ　ミリー！

タブレット夫人　今はもうあたしも歳を取ったし、彼も退職してる。でもあの頃はあたしたち、お互いが世界のすべてだった。けれど、あたしはその恋に身を任せることはしなかった、子供たちのためにね。心は張り裂けそうだった。でも、今は、それで良かったと思ってる。人は愛の痛みから立ち直ることはできるわ。今、この古風で、おかしな長官を見ていると、何故この人があの時はあんな嵐のような情熱を掻き立てたのかしらって不思議に思う。あたし、コリンとステラに言おうと思えば言えた、――たとえ辛くても今は愛の嵐に耐えなさいって。三十年経ったら、それはそれで良かった、あるいはどちらでも同じだったって思えるようになるわって。でも、人間って、他の人の経験から学ぶってことはないのよね。

ウェイランド　でも、奥様は誘惑に耐えた。あくまで正しいことをした、――それは誇りになさってよいことですわ。

タブレット夫人　ねえ、あの頃はその方が簡単だったのよ。あの遥か遠い昔には、みんな、今よりずっと貞節ってものに重きを置いていたから。そう、確かにあたしは耐えた。でも、あたし、あの時の苦しみを知ってる。だから、その誘惑に耐えられない人たち、あるいはあたしより勇気のある人たちを赦す資格があると思うの。

ウェイランド　誘惑に打ち勝ってこそ、人間の魂は鍛（きた）えられるんじゃないでしょうか。

タブレット夫人　もしかしたらね。でも、あたし、時々考えるんだけど、あたしたちが見事に打ち勝つ誘惑って、本当はそんなに大したものじゃないことが多い、――そうじゃないかしら？　あたし、人間と誘惑との関係について考える時、川と堤防のことを思わずにいられない。水がそんなに沢山流れていない時は、堤防は立派にその役目を果たしてる。でも一旦洪水になると、何の役にも立たない。川の水は堤防を乗りこえて、大災害を引き起こす。

ステラ　ああ、おかあさま、なんて優しい、なんて賢明な……

タブレット夫人　そうじゃないわ、ステラ、あたしは歳を取っただけ。

リコンダ　（優しく、しかしはっきりと）ステラ、ウェイランドさんのきみに対する告発は決定的なものだ。ちゃんと対応しなくてはいけない。

ステラ　でも、馬鹿げてますわ。

リコンダ　モーリスの死因がクロラリンの飲み過ぎだとするなら、誰かが飲ませたことになる。

ステラ　ええ。

リコンダ　モーリスの死を少しでも望んでいた人間を誰か思いつくかね？

ステラ　いいえ。

リコンダ　きみは真相の究明を手伝ってくれるものと思う。そこで、訊きにくいことなんだが……

ステラ　どうぞ、ご遠慮なく。

リコンダ　お腹に赤ちゃんがいると判った時、きみはどうするつもりだったんだね？

ステラ　どうしたらいいのか分かりませんでした。怖かった。最初は信じられなかった。

リコンダ　そう長く隠しておけないことは分かっていたと思うが。
ステラ　ええ、勿論です。でも何かが起こって、どうにかなるんじゃないかと……。わたし、動転していて。
リコンダ　誰かに話したかね？
ステラ　いいえ。勇気を出してハーヴェスター先生に相談してみようかと思いました、どうすべきなのかと。自分のことは気になりませんでした。モーリスのことが心配だったんです。
リコンダ　何らかの考えは持っていたと思うのだが。
ステラ　ええ、色んなことを考えましたわ。昼も夜もそれしか考えられなかった。どこか暫く身を隠す場所はないか。先生にお願いして、妊娠の兆候が明らかになる前に、病気だということにしてもらおう。転地療養が必要だとおっしゃってもらえれば、赤ちゃんが生まれるまでここを離れていられる。
リコンダ　モーリスに正直に話してしまおうとは思わなかったのだね？
ステラ　それだけは。そんなことをしたらあの人の心を粉々にしてしまう。あの人はきっと赦してくれたでしょう。それほどにわたしを愛していた。でも、わたしには耐えられなかった、わたしに寄せている絶対的な信頼を砕いてしまうようなことは。だって、あの人にとってはそれがすべてだったんですもの。
リコンダ　どうやら最後にモーリスに会ったのはきみのようなのだが。
ステラ　そうです。寝室にさがる前に、おやすみを言いにあの人の部屋に寄りました。

リコンダ　その時どんな話を？
ステラ　特別なことは何も。
リコンダ　先刻（さっき）きみは、モーリスはかなり神経が昂（たか）ぶっていたと言わなかったかな？　泣いたとも。
ステラ　ええ。でもそれは寝室にさがるずっと前のことです。
リコンダ　何故そんなに昂奮したんだろう。
ステラ　話さなくてはいけませんか。とてもプライベートなことなんですが。
リコンダ　いや、その必要はない。そうしたことを訊く権利はわたしにはない。ただ、どうも腑に落ちないことが沢山あって、もし全てを話してくれるなら、きみのためにもなるんじゃないかと……。
ステラ　あの人が泣き崩れたのは、あの人、……あの人が願うようにわたしを愛することができないから。あの人、子供が欲しかったんです。
リコンダ　で、きみがおやすみを言いに行った時には、そのことには触れなかったんだね？
ステラ　ええ、なにも。完全に立ち直っていて、いつもどおりの明るいモーリスでした。
リコンダ　彼はどんなことを言ったのかね？
ステラ　ただ、サンドイッチは美味（おい）しかったかと。それから、もう寝た方が良（い）いと。わたしも、ちょっと寄ってみただけ、と言って、それからキスをして、じゃあ、おやすみなさい、と。
リコンダ　部屋にはどのくらいの時間？
ステラ　五分ほどです。

リコンダ　モーリスは、眠くて堪らないというようなことは言わなかったかね？
ステラ　いいえ。
リコンダ　きみはクロラリンがどこに仕舞ってあるかは知っていたんだよね？
ステラ　大体は。お薬の類が浴室にあることは知っていました。そうしたもので部屋が散らかるのを嫌がっていましたから。
リコンダ　部屋を出る前に、モーリスは何か頼まなかったかな？
ステラ　いいえ、なにも。必要なことは全てウェイランドさんがやってくれますから。
ウェイランド　（ステラに向かって、凍りつくような調子で）解ってないわねェ。長官は助け舟を出してくださってるのよ。モーリスさまがクロラリンを取ってほしいと頼んだんなら、あなたに殺意はなかったことになる。あなたはモーリスさまが五、六錠瓶から取り出すのを見たと言えばいい。それから瓶を元に戻したと。
ステラ　（皮肉っぽく）それは考えなかった。確かに、それで窮地を脱することができたでしょうね、もしもわたしがモーリスを殺害したんなら。いいえ、長官、あの人はクロラリンを取ってくれとは言いませんでしたし、わたしもあの人にクロラリンを渡してはいません。
ウェイランド　一つうかがってもいい？
ステラ　どうぞ。
ウェイランド　今朝わたしが食堂に入って、今モーリスさまのお部屋に行ってきましたと言ったら、あなたはひどく取り乱した、――何故なんです？

ステラ　あの人が死んだと言われた時のこと？　あなただって、まさか、今日は好いお天気ですねって言われたみたいに、卵を食べ続けていられるとは思わないでしょう。
ウェイランド　その時のことではありません。わたしが食堂に入った時には、あなたはまだモーリスさまが亡くなったことは知らなかったはずです、――千里眼をお持ちなら別ですけど。
ステラ　ああ、そういうことね。わたし腹が立ったんです、呼ばれてもいないのに部屋に入ったと知って。睡眠というのはとっても気持の良いものだし、それに大切なものよ。眠っている人を理由もなく起こしちゃいけないと思うの。
ウェイランド　わたしがあの方のお部屋に早く入りすぎたと心配になったのではありませんか？　まだモーリスさまが生きていて、わたしが命を助けてしまったのではないかと。
ステラ　あなた、どうしてもわたしがモーリスを殺したことにしたいみたいね？
ウェイランド　わたしだけではないはずです。
ステラ　何故そう思うの？
ウェイランド　長官がモーリスさまは薬を取ってくれと頼まなかったかと訊きましたが、なぜ逃げ道を匂わしたと思います？
リコンダ　（苦々しく）ウェイランド君、きみはもう義務だと思っていることは済ませたんじゃないのかね、充分すぎるほど立派に。何か他にすることがあるんなら、どうぞご自由に。これ以上きみの時間を拝借する必要はない。
ウェイランド　そういうことなら、失礼いたします。ここにいてもやることはなさそうですから。皆

さんわたしを憎んでいる。わたしがこのようなことをする動機を卑しいものだと思っている。もう荷造りは始めています、皆さんがお食事をとっている間に。あと十分もあれば済むでしょう。

タブレット夫人　ゆっくりやってくれて構わないのよ。

ウェイランド　ありがとうございます、奥様。でも、皆さんが早くわたしを追い出したいのと同じくらい、わたしも早くこの家から出て行きたいんです。タクシーを呼んでいただければ有難いのですが。

タブレット夫人　それなら、コリンがタクシー乗り場へ行って呼んできてくれるわ。早い方がいいでしょう？　お願いね、コリン。

コリン　諒解。

コリンは**ウェイランド**のためにドアを開け、彼女のあとに続いて部屋を出る。他の者は無言でそれを見ている。ドアが閉まる。

タブレット夫人　かわいそうなウェイランドさん。あの人なりに正しいと思うことをしているのに、なんだか自分を犯罪者のように感じてる。魅力のない女って損ね、良いところをいっぱい持ってるのに。あたし、ウェイランドさんに同情する。

リコンダ　ちょっとステラと二人だけで話したいのですが。

タブレット夫人　あなたがそうお望みなら。ハーヴェスター先生、お庭を散歩しません？

ハーヴェスター　喜んで。

タブレット夫人　ごめんなさいねェ、あなたにはまったく関係のないことでお時間を取らせて。

ハーヴェスター　関係なければどんなに有難いことか。

二人は出てゆく。

リコンダ　ステラ、これからどうするつもりかな？

ステラ　分かりません。何ができるというんでしょう？　罠に嵌った鼠のような気分。

リコンダ　ここまで来た以上、もう止めることはできんだろう。

ステラ　一体どうなるんでしょう？

リコンダ　まずハーヴェスター先生は検屍官に報告しなくてはならない。そして検屍解剖が行なわれることになる。で、もし――残念ながら間違いなかろうが――死因がクロラリンということになれば、尋問があって、陪審員の評決を待つことになる。

ステラ　それから？

リコンダ　何者かが毒を盛ったという結論になれば、警察が介入してくる。その時は、きみも最悪の事態を覚悟しなくてはならない。

ステラ　殺人の罪で裁判にかけられる？

リコンダ　裁判を始めるには証拠が不十分、と検察が考える可能性もなくはないが。

ステラ　わたしには色々と欠点はありますが、でも、信じてください、わたしはこんな非道いことをする人間ではありません。

リコンダ　まずは事実を事実として直視することだ。見て見ぬ風をしてもしょうがない。きみは身籠っている。その父親がモーリスだということは有り得ない。きみはそれをモーリスに知られることを恐れていた。

ステラ　ええ、死ぬほど。

リコンダ　昨夜きみたちの間に、モーリスの心を悩ませるようなことが起こった。彼を最後に見たのはきみだ。モーリスは朝は好きなだけ寝ていることを許されていた。きみは看護婦が彼の寝室に入ったのを知って激昂した。モーリスは死んでいた。そしてクロラリンが五錠瓶から消えていたが、モーリスが自分で取ることは不可能だった。誰がそれを与えたのだろう？

ステラ　どうしてそんなことがわたしに？

リコンダ　分かってほしい、きみを助けたいんだ。わたしはきみの味方なんだ。遠回しに言っても仕方なかろう、きみは極めて苦しい立場にある。

ステラ　わたしが犯人だとお考えで？――あなた御自身は。

リコンダ　本当のところを聞きたいかね？

ステラ　ええ。

リコンダ　わたしは……、何とも言えない。

ステラ　（いかにも考えている風に）分かりました。

リコンダ　勿論、すべては状況証拠に過ぎない。しかし、すべての断片が見事に一つの枠に収まっていることも確かだ。きみも、何故きみに疑いが掛けられたか解ると思う。

ステラ　（幾分かユーモアをもって）本当に見事なジグソーパズル。わたしだって、もしモーリスを殺めたのは自分ではないと知らなかったら、わたしが犯人だと思いますわ。いま自分の弁護のために言えるのは、わたしという人間を知っている人なら、わたしがモーリスを殺すなんてありえない、そう思ってくれるだろうということだけ。

リコンダ　わたしは仕事の関係上色々な犯罪を扱ってきたが、辛かったことの一つは、普段は法律を遵守している真面そのものの人が、何かよく解らないものに駆られて犯罪に手を染めてしまうということだ。絶対に罪は犯さないと言えるような人間はほとんどいない。通りを歩いていて偶々落ちてきた煙突の笠に当たってしまうことが絶対ないとは言いきれないように、誰もがひょんな勢みで罪を犯してしまうことはあるんだ。

ステラ　（からだを震わせて）怖ろしいこと！

リコンダ　有罪か無罪かを判断するのはわたしの仕事ではない。わたしにできるのは、今きわめて苦しい状況に置かれているきみに深く同情することだけだ。きみも我々イギリス人がどんな国民か分かっていると思う。性の絡んだ犯罪に対しては情け容赦ない。義理の弟と関係があったと判れば、陪審員は最初から色眼鏡できみを見るだろう。

ステラ　コリンがかわいそう。色んな厭なことに耐えなくちゃならないでしょうね。

リコンダ　心底愛しているんだね？

ステラ　愛しています。でもそれはモーリスへの愛とは違う。モーリスへの愛は、曇りのない、誇らしいものだった、息をしているのと同じように自然な。永遠に続いてゆくと思っていた。でも、コリンへの愛の中には、苦しみや、後悔の念がある。この愛もいつかは終わることがあるんだという苦い気持も。

リコンダ　その苦い気持はよく解る。それで時に、人生はまやかしではないかと疑いたくなる。

ステラ　何とかコリンを巻き込まないで済ますことはできないんでしょうか？

リコンダ　残念ながら無理だろう。まあ、弁護士と話してみなければ確かなことは言えんが。そこで、弁護士の件だが、早急に誰が一番良いかを考えなくては。その前に一つ是非忠告しておきたいことがある。弁護士には一切隠し事をしてはいけない。容疑者が容疑を晴らすためには全ての真実を弁護士に伝えておくしかない。

ステラ　わたし、最初から真実しか言っていません。

リコンダ　わたしは、……そう願っている。

コリンが入ってくる。**ステラ**は煽られたように彼に駆け寄る。

ステラ　ああ、コリン、あなたは信じてくれるわよね。みんながあたしを犯人扱いするけど、あたしにあんなことできるはずないって。

コリン　（彼女を抱きしめて）ステラ。ステラ。

ステラ　あたし、……怖いの。

コリン　何も怖がることはないよ。きみは無実だ。誰もきみに手は出せない。

ステラ　でも、もうお終いね、この先どうなるにしても。わたしたちのことは世間に知れ渡ってしまう。みんなの目には、わたしたち、とんでもない人間、獣にしか見えない。きっと酷いことを言われるわ。あなたを愛さないようにとわたしがどれほど苦しんだか、世間の人には分からない。あなたも非難される、――誘惑に負けたって。誘惑に負けないようにどんなに努力したかなんて問題じゃない。世間の人には、結果が全てなのよ。過程なんかどうでもいい。

コリン　ぼくはきみのためになら命を投げ出したっていいと思ってる。そのぼくの所為で、きみがこんなに惨めになってしまうなんて。

ステラ　これまでも随分と辛いことを経験しなくちゃならなかった、それを考えると、あなたにこのまま側にいてほしい、愛し続けてほしいとは言えない。ああ、何てこと！　わたしたち、どこに身を隠したらいいの？

コリン　ぼくは永遠にきみを愛する。ぼくにとってはきみが全てなんだ。きみがぼくの世界なんだ。

ステラ　わたしに言い寄ってきた男性は沢山いたわ。でも何の意味もなかった。ただその人たちを笑っていただけ。あなたに会うまでは自分がモーリスを裏切ることがあるなんて考えたこともなかった。悩んだことなんて一度もなかった。別の世界のことだと思ってた。わたしはあなたを愛してるんだって分かった時には、もう遅過ぎた。

コリン　今ぼくに言えるのは、何が起こっても、ぼくを愛したことを後悔しないでほしいということ

だけだ。

ステラ　後悔だなんて、そんなこと絶対ありえない。

コリン　（精一杯の優しさを込めて）ああ、ステラ、愛してる。

ステラ　運命はなんて残酷なの。なんて酷（むご）い罠を仕掛けたの。あたしには何の悪意も邪（よこしま）な心もないのに、端（はた）から見れば最低の女、獣（けだもの）にも劣る女。まるで三月の嵐が去年の落ち葉を吹き払うようにわたしを攫（さら）っていった恋、――その気持に負けたからといって、どうしてこんな罰を受けなくちゃならないの。（注5）

コリン　たとえどんな罰を受けることになっても、二人で耐えてゆこう。ステラ、どんなに苦い薬でも、きみと一緒になら耐えられる。ぼくらを引き離すことは誰にもできない。

ステラ　（必死に）リコンダ長官、わたしたち、どうしたらいいんでしょう。何かおっしゃって。わたしたちを助けて。

リコンダ　（低い、重々しい調子で）わたしにどんな忠告ができるというのか。わたしに言えるのは、もしわたしがあなたの立場だったら、……。

ステラ　もしわたしの立場だったら？

リコンダ　自分が無実なら、あくまでその主張を貫き通す。わたしなら自分にこう言うだろう、――自分は、道徳的には罪を犯したのかも知れない。世間はそう言うし、それを決めるのは世間だ。しかし、何をしたにせよ、自分がそうしたのは、それ以外には為（な）しようがなかったのだ。だから、その結果には甘んじて耐えてゆこう、と。が、もし自分がその時錯乱していたのであれ、一時的

な狂気に駆られたのであれ、法律が死刑に価すると言っている罪を犯してしまったのなら、わたしなら、裁判が終わるのを待つようなことはしない。法の手の届かないところへ自分を送ってくれる、素早く確実な途（みち）を取る。

ステラ　わたしはやっていません。無実です。

リコンダ　もしそうでなかったら、あなたに伝えようと思っていた、――わたしの机の引出しに弾の込められた銃がある、あなたがわたしの家に行き、書斎に入るのを妨げる者は誰もいない、と。

ステラは怯えた表情で**リコンダ**を見つめる。恐怖のため、動悸が激しく搏（う）っている。**リコンダ**は視線を落とし、**ステラ**から顔を背ける。怖ろしい沈黙が続く。やがて**ウェイランド**が入ってくる。今は看護婦の制服は着ていない。外套（コート）の下にスカートが見え、手には帽子を持っている。**ステラ**は自分を取り戻し、救われたように**ウェイランド**に話しかける。冷静で洗練された口調である。

ステラ　ウェイランドさん、早かったわね。

ウェイランド　荷造りしなくてはならないものは余り残っていませんでした。トランクを下に運んでくれるようにとアリスに頼みました。

ステラ　今日は植木屋さんが来ているはずだから、手を貸してくれるわ。

ウェイランド　お別れする前に奥様にご挨拶申し上げたいのですが。

ステラ　おかあさまもきっとそれをお望みでしょう。今、庭にいらっしゃる。
ウェイランド　では、わたくしはお庭の方へ。
ステラ　あら、その必要はなくってよ。コリンが呼んでくれるわ。長官がわたしと二人だけで話したいとおっしゃるので、おかあさまは庭に出てくださったの。

コリンは窓に寄り、叫ぶ。

コリン　母さん。
タブレット夫人　（庭から）呼んだ？
コリン　ウェイランドさんが挨拶したいって。
タブレット夫人　いま行く。

部屋の四人は無言で立っている。四人全員にはこの短い時間がなにか破局をもたらす瞬間のように感ぜられている。**タブレット夫人**が入ってくる。続いて**ハーヴェスター医師**。

タブレット夫人　（何も深刻なことは起こっていないかのように、微笑みを浮かべて）ウェイランドさん、タクシーは来た？
ウェイランド　はい、近づいて来るのが窓から見えました。奥様、この五年間本当にお世話になりま

した。奥様のご親切に感謝申し上げることなくここを去るわけにはまいりませんでした。
タブレット夫人　あなたはとてもよくやってくれたし、面倒を起こしたことは一度もなかった。だから親切にしないでいられなかったの。
ウェイランド　そんな奥様に、最後の最後になって、こんな混乱とご心痛を与えてしまったことを本当に申し訳なく思っています。いま奥様がわたくしを憎んでいらっしゃることは承知しております。非道い女だとお思いでしょう。でも、信じてください、こうするより他なかったんです。
タブレット夫人　お別れする前に、今あなたを不幸にしている苦々しい気持から解放してあげられたらと思うんだけど……。ねえ、あたしたちは誰も一つの纏まった人格を持っているわけじゃないわ。一人の人間の中には幾つもの面が存在しているのよ。だから、あなたがステラに嫉妬したのは間違いだった。なぜって、モーリスの或る一つの面が求めて已まなかったものをあの子に与えられたのは、あなただけだったんですもの。その意味で、あの子の心のその部分はあなたのものだったのよ。あたしたちは、全ての人間に対してなら全てのものになれるかも知れない。でも、或る一人の人に対してもその人の全てになれるのかしら？　あたしたち一人ひとりにとって全てのものであるような人って、いるのかしら。あたしは他の人が誰も知らないモーリスの一面を知っていたし、他の人には誰にも与えられないものをモーリスに与えることができた。でも、あたしは誰の邪魔もしなかった。もしあたしが、あの子のステラに対する情熱に嫉妬したとしたら、それは寛大さに欠けるってことにならないかしら。あの子をあなたに結びつけている、優しい、戦友のような気持に嫉妬したとしたら、それは心が狭いってことにならないかしら。かわいそう

なモーリス。あなたはあの子に親切の限りを尽くしてくれた。無私の愛情を注いでくれた。あたし、心からあなたに感謝している。

タブレット夫人は**ウェイランド看護婦**の手を取り、両頬にキスをする。

ウェイランド　（啜り泣きながら）奥様、わたし……切ない。

タブレット夫人　ねえ、あなた、いつものあなたの、あの素晴しい自制心をなくしちゃいけないわ。オムレツを作るためには、悲しいけれど卵を割らなくちゃならないの。それに、誰の心の中にだって邪悪な面はある。それが分かっているからこそ、どんなに尊敬に値する人だって、罪人を裁きの場に引っ張って行く時には、良心に一抹の不安や痛みを感じないではいられないの。

リコンダ　ウェイランドさん、新しい住所を残していってください。ハーヴェスター先生が然るべき筋と連絡を取るでしょうから、そのうち必ず当局はあなたの居場所を知りたがる。

ハーヴェスター　わたしは検屍官のところへ行って事実を告げるつもりだが、一緒に来ますか？

ウェイランド　いいえ。

ハーヴェスター　タブレット夫人、もしよろしければ、今この場で検屍官のところに電話して、居るかどうか確かめたいのですが。

タブレット夫人　どうぞ、ご遠慮なく。でも、電話なさる前にもう少しだけお話してもよろしくて？

ハーヴェスター　お好きなだけ。

タブレット夫人　簡潔に話すように努力しますわ。ウェイランドさんはモーリスが最後に会った人間はステラだと考えているようですが、それは違います。その後あたしはあの子に会って話をしました。

ウェイランド　（吃驚して）奥様が？

ハーヴェスター　目はしっかり覚ましていましたか？　もしクロラリンを六錠も飲んだとしたら、昏睡とまでは行かなくても、かなり朦朧としていたはずですが。

タブレット夫人　ちょっと待って、先生。あたしのやり方でお話しさせてくださる？

ハーヴェスター　これは失礼。

タブレット夫人　モーリスの寝室はあたしの部屋の真下にありますよね。あの子はいつも窓を開けていた。眠れなくて明かりを点けていると、あたしの部屋からそれが判るんです。そんな時にはそっと下へ行って、あの子のベッドの横に腰掛け、明かりを消して、話をしたものです。時にはインドでの子供の頃の話。あたしが若かった頃の話もよくしたわ。でも、時には、昼間の眩しい光の中ではとてもできないような話もした。あの子は、どんなにステラを愛しているか、どんなにステラの幸福を願っているか話した。人の生命を取り巻く神秘についても話したわ。で、あの子が眠りに落ちると、あたしはまたそっと自分の部屋に戻った。わたしたちがどんなことを話したか、これまで誰にも言ったことはない。（ちょっと皮肉っぽい笑みを浮かべて）息子のお嫁さんと同じ家に暮らしてる母親の立場って、ちょっと微妙なところがあるでしょ？　あたし、本来なら嫁がやるべきことを勝手にやってるってステラに思われたくなかったの。

ステラ　おかあさま、わたし、そんなことちっとも気にしませんわ。

タブレット夫人　ええ、そうね。あなたのことですもの、そんなこと、心配する必要はなかったんでしょうね。でも、他の人の負担になるようなことは避けるに越したことはない。あの子の側に座って過ごしたそうした長い夜、あの子が見せたああした側面は、あたしにしか、母親のあたしにしか応えてやれないものだった。……あたし、昨夜は眠れなかった。モーリスの部屋に明かりは点いていなかったけれど、不思議に、あの子も起きているような気がした。あたしは下に降りて、庭からあの子の部屋を覗いてみた。あの子がわたしの影に気がついて、母さん？　来るだろうと思った、って言った。

ハーヴェスター　何時頃でしたか。

タブレット夫人　さあ。多分、あなたがお帰りになってから一時間ほど経っていたんじゃないかしら。モーリスは、薬を飲んだのだけれど効果がないみたいだと言う。目が冴えて眠れないと。それから、母さん、お願いだから、もう一錠飲ませてくれない、一度くらいなら大丈夫だと思う、ぐっすり眠りたいんだって。

ハーヴェスター　あれやこれやでモーリスはとても神経が昂ぶっていた。一錠では効かなかったのかも知れない。

タブレット夫人　（極めて穏やかに）あの事故があってすぐの頃、わたしはモーリスに約束した、――もしもあなたが人生に耐えられなくなったら、それを終わらせる手段を与えてあげますって。

ステラ　ああ、神様。

タブレット夫人　もし苦痛が大きすぎて、もうこれ以上は耐えて行く気力がないと本気で助けを求めてきたら、怯むことなく自分の責任で薬を与えると約束した。安らかに永遠の眠りにつけるだけのお薬をあげますって。あの子、時々、例の約束はまだ有効ですかって訊いたわ。わたしは、ええ、ええ、有効よって答えた。

ステラ　（動揺して）あの人、昨夜それを求めたんですか。

タブレット夫人　いいえ。

リコンダ　じゃあ、一体何があったんです。

タブレット夫人　わたし、モーリスにとってステラの愛がすべてだと分かっていた。そして、今ステラにはモーリスに与えられる愛は何もないことも。この子は持てる愛のすべてをコリンに与えてしまったのだから。もしも幻想というものがなかったら、わたしたち、どうして生きていけるというの？　わたしたちが人に求めることができるのは、自分の幻想を持ち続けるのを許してもらうことだけ。かわいそうに、モーリスが何とか苦痛に耐えていられたのは、幻想があったから。もしその幻想が打ち砕かれたら、あの子はすべてを失うことになる。ステラはあの子のためにあらゆることをしてくれた、母親のわたしが求める以上のことを。わたしは更にそれ以上をこの子に求めるほど自分勝手じゃない。女性にとって価値あるものをすべて犠牲にしてくれと頼むことはわたしにはできない。

ステラ　どうして話してくださらなかったんですか。

タブレット夫人　随分と昔のことだけど、あたしは息子たちのために、今そこに立っている年老いた、

おかしな長官への愛を無理にも抹殺した。あの時は人生にあれ以上の犠牲があるなんて考えられなかった。でも、今になってみれば、あの時の犠牲なんて何でもない。わたしはモーリスが大好きだった。誰よりも愛していた。あの子が死んで、わたしはひとりぼっち。あの子は美しい夢を見ていたわ。その夢からあの子を覚ますなんて、そんなことわたしにはできなかった。あの子にいのちを授けたのはわたし、だから、あの子からそのいのちを奪うのもわたし。

ウェイランド　（恐怖に打たれて）奥様、有り得ません！　なんて怖ろしい！

リコンダ　ミリー！　ミリー！　何を言いだすんだ！

タブレット夫人　わたしは浴室に行って椅子に乗り、クロラリンの瓶を取った。ウェイランドさん、あなたも知っているように五錠ね。それを水に溶かして、モーリスのところへ持って行った。あの子はそれを一呑にした、苦いねって。それで多分グラスの底に少し残したんでしょう。わたしはあの子の手を握って、眠りにつくまで側に座っていた。手を離した時、わたしには判っていた、――この子がこの眠りから覚めることはないだろうって。あの子は最後まであの子の夢を見続けた。

ステラ　（夫人を抱きかかえて）ああ、おかあさま、おかあさま。何てことを！　一体この先どうなるの？　わたし、怖い。

タブレット夫人　（優しくステラを離しながら）ねえ、あなた、わたしのことは心配してくれなくていいのよ。自分が何をしているかちゃんと分かっていてやったんだから、その結果には潔く耐えてゆくつもり。責任逃れをするつもりはないわ。

ステラ　わたしの責任です。わたしが弱かったから……。自分が赦せない。ああ、わたし、何てことをしてしまったの。

タブレット夫人　そんなに感傷的になることはないわ、莫迦ねェ。あなたはコリンを愛している。コリンもあなたを愛している。わたしのことは考えちゃいけない。わたしがどんなことになろうと、あなたが苦しむことはないわ。アメリカに行きなさい。そして結婚して子供を生むの。過去のこと、死んだ人のことは忘れなさい。あなたは若いんだし、若い人には自分の人生を生きる権利がある。未来はあなたたちのものなんだから。

コリン　母さん。……母さん、ぼくは自分が恥ずかしい。

タブレット夫人　コリン、わたしはあなたも愛しているわ。あなたが仕合せになってくれることを心から願ってる。

リコンダ　ミリー！　ミリー！　わたしは……。

タブレット夫人　（不屈の笑みを浮かべて）さて、ウェイランドさん。あなたは正しかった。あたし、風邪薬でも頭痛薬でも何でもいいから、代りのお薬を瓶に入れておくべきだった。でも、あなたも言ったように、犯人はしばしばミスを犯すのよね。それに、わたしは殺しのプロじゃないし。

暫くの間がある。

ウェイランド　ハーヴェスター先生、今でも死亡証明書にサインなさるつもりはおありですか。

ハーヴェスター　えっ、ええ。

ウェイランド　では、サインなさってください。もし審問が行われるようでしたら、わたしが薬の瓶をベッドの横に置いた、とお答えします。

ステラ　ウェイランドさん！

タブレット夫人　（ハーヴェスターに）あなたが大変な危険を背負い込むことになるのでは？

ハーヴェスター　糞喰らえですよ。気にしません。

リコンダ　ああ、ウェイランドさん、あなたに感謝する。わたしたちは皆んな、心からあなたに感謝します。

ウェイランド看護婦は床に膝をつくと、**タブレット夫人**のスカートに腕を廻す。

ウェイランド　ああ、奥様、わたし、なんて嫌な人間だったんでしょう。心の狭い、復讐心でいっぱいの。自分がこんな卑しい人間だったとは……。

タブレット夫人　さあ、さあ、あなた、みんなを感傷的にさせないで。今はあたしたち二人とも孤独な女。これからは、二人寄り添ってゆきましょう。あたしたち二人がモーリスへの愛を失わずにいる限り、あの子は決して死んだわけじゃないのよ。

［幕］

注

（注１）66ページ　ロバート・ルイス・スティーヴンソン『レクイエム』
Under the wide and starry sky, / Dig the grave and let me lie. / Glad did I live and gladly die, / And I laid me down with a will. // This be the verse you grave for me: / *Here he lies where he longed to be;* / *Home is the sailor, home from the sea,* / *And the hunter home from the hill.*　満天の星月夜に、墓を掘りて、我を埋めよ／我は嬉々として生きたれば、／我は嬉々として死にたれり。／我は嬉々として身を委ねたり。／わが墓碑をかくのごとく刻み給へ。／彼は眠る、ここ望みしところに／船乗りは戻りぬ、海原から我が家に、／狩り人は戻りぬ、山並から我が家に。（丹沢栄一訳）なお丹沢氏はこの場面について、「タブレット夫人は〝星の連想〟で、インド時代に思いを馳せ、宇宙観などを披歴していると思われます」と述べている。

（注２）73 75ページ　アレクザンダー・ポープ "An Epistle to Dr Arbuthnot"

（注３）106ページ　新約聖書「使徒行伝」20の35

（注４）111ページ　新約聖書　「マタイ福音書」７の９　「ルカ福音書」11の11

（注５）129ページ　March comes in like a lion, and goes out like a lamb.「３月はライオンのようにやってくるが、出ていくときは子羊のようだ。」イギリスの天候にまつわる言い伝え。

訳者あとがき

『聖なる炎』（*THE SACRED FLAME*　一九二八年）はモーム五十四歳の時の作品である。

『サミング・アップ』（一九三八）の第三十章から四十二章は演劇についての考察で、その最後の数章は、最終的に何故彼が戯曲から身を引き小説に専念するようになったかが述べられている箇所だが、第四十一章で、「芝居においてどうしても必要とされる様々な制約に私は最早これ以上従いたくなかった、小説の持つ自由さを思って溜息を吐いた」と書いた後、第四十二章で、「しかし頭の中にはまだ幾つかの戯曲があった。そのうちの二、三は漠然とした計画だけのもので、捨て去って一向構わなかったが、四編はいつかは書こうと長年温めてきたものだったから、書き上げてしまわなければずっとそれに悩まされ続けるだろうと分かっていた」と述べている。この四つの作品とは『聖なる炎』、『わが家の稼ぎ手』（一九三〇）、『報いられたたもの』（一九三二）、『シェピー』（一九三三）である。

「それまで書かないでいたのは、これらの作品が観客に受けるとは思わなかったからである。私の持つブルジョワ的本能のせいかもしれないが、私は劇場支配人に損をさせるのは嫌だった。実際それまで損をさせてきたつもりはない。五つに一つ当たればいいところというのが常識の演劇の世界で、私の作品は五つのうち四つは支配人を儲けさせたと言っても決して過言ではないと思う。私はこの最後の四つの作品を、確実に不入りになってゆくであろう順番で発表することにした。演劇の世界から完全に身を引き終わるまで、大衆に対する私の人気を壊してしまいたくなかったのだ。驚いたことに、

最初の二つはかなりの成功を収めた。最後の二つは予想どおり不評だった。」（同四十二章）

記録によると、ロンドンでの初演の公演回数は『聖なる炎』二百九回、『わが家の稼ぎ手』百五十八回、『報いられたもの』七十八回、『シェピー』八十三回である。確かに、公演回数だけを見れば、『報いられたもの』『シェピー』は失敗作のように見えるが、それは喜劇作家としてのモームに慣れ親しんでいた当時の観客が彼の新しさに従いて行けなかったということであって、作品自体が駄作だということではない。むしろ今では、約二十七編あるモームの戯曲の中でも、この二作（取分け『報いられたもの』）は傑作と考えられている。ベートーヴェンの後期の作品群にも似て、作者がもっぱら自分のために書いた作品が、時間を追うごとに評価を高めてきたと言ってもよい。（かつて新潮社から出されていたモーム選集では戯曲として、中期のものから『おえらがた』『ひとめぐり』、後期のものから『報いられたもの』『シェピー』が選ばれていた。）ちなみに、『聖なる炎』が書かれた一九二八年から『シェピー』が書かれた一九三三年の間に、戯曲以外でモームが発表した作品は、短編集『アシェンデン』（二八）、旅行記『一等船室の紳士』（三〇）、長編小説『お菓子とビール』（三〇）、短編集『一人称単数』（三一）、長編小説『片隅の人生』（三二）、短編集『阿慶』（三三）である。これを見ただけで、この時期がモームにとっていかに充実した時期であったかが判るだろう。

『サミング・アップ』第四十二章をもう少し続けよう。「驚いたことに、最初の二つはかなりの成功を収めた。最後の二つは予想どおり不評だった。ここではそのうちの一つについて話してみたい。『聖なる炎』についてである。その理由は一にこの作品で試みた実験のためである。今この本（『サミング・アップ』）を手にしてくれている読者の中にはその実験が暫しの考察に値するものと考えて

くれる人がいると思うからである。私が試みたのは、これまで私が用いてきたのとは違う、もっとフォーマルな台詞を用いて作品を書くということである。（……中略……）私は『聖なる炎』を、実際に登場人物たちが話したであろう言葉ではなく、もっとフォーマルな言葉、つまり、もしあらかじめ準備する時間があったなら彼等が使ったであろう言葉、自分の言いたいことを充分に選び抜いた言葉で正確に言えたならそう言ったであろう言葉で書いてみようと思った。」

果たして私のこの翻訳がモームの意図したところをどれほど伝えられたか、甚だ心許無い。翻訳に当たっては、或る程度の格調は保ちながらも、耳で聴いたとき意味が伝わることをまず優先し、次にモームが普段心掛けていたという「簡潔」「明晰」「音調の良さ」を持った日本語を目指した。従って『聖なる炎』の原文が持つ上品で重厚な響きといった要素は多少犠牲にせざるを得なかった。その点ご容赦願いたい。

さて、話変わって、「訳者あとがき」とはいえ、作品を読んだあとで「あとがき」を読む人は実は少ないのではあるまいか。かく言う私も書店で立ち読みする時、推理小説以外なら、最初の数ページを読んだ後、「あとがき」があればそれを読む。従って、今この本を読んでくださっているあなたが、まだ『聖なる炎』自体を読んでいないことは十二分に有り得ると思う。そうであるなら、是非今すぐ作品自体に移ってくださるようお願いしたい。アガサ・クリスティーの作品を読む時、先に犯人を教えてほしいと思う人は誰もいないだろう。『聖なる炎』は推理劇ではないが、推理劇的要素は大いに持っている。最初にこの劇を観たロンドンの観客は、二幕と三幕との幕間に、友人同士あるいは夫婦で、モーリスの死の真相についてあれこれと意見を戦わせたのではあるまいか。

＊　＊　＊

では、あなたが『聖なる炎』を読み終えたものとして、「あとがき」を続けよう。

時にモームは古臭い作家だと言われる。しかしそれは技巧の面の話である。モームは小説においても戯曲においても新しい技法を開拓しようという気持はほとんど持っていなかった。小説では飽くまでも炉端の語り手で良しとしていたし、ほとんどの戯曲では「序破急」の三幕物の形式を守り、科白劇に徹した。音楽に喩えるなら、調性を守り、形式を遵守したのだ。

しかし内容の面では――いま振り返ってみれば――かなり革新的だったと言えるのではなかろうか。女性の性欲をあからさまに描いた『クラドック夫人』が出版されたのは一九〇二年、実にあの『チャタレイ夫人の恋人』の二十六年前である。（ということは『聖なる炎』と『チャタレイ』は同じ年に世に出たことになる。下半身不随になった夫を持つ若妻という設定は単なる偶然の一致だろう。）この『聖なる炎』では安楽死の問題が取り上げられているが、森鴎外の『高瀬舟』の出版は一九一六年。十二年の隔たりはあるものの、日本よりも遥かに生きることを大切にし、自殺を罪とするイギリス（キリスト教の世界）において、一九二八年にこの問題を正面切って取り上げたのは、随分と革新的だったのではあるまいか。また『聖なる炎』の一つ前の戯曲『コンスタント・ワイフ』（一九二七年、但し、この二つの戯曲の間にモームは短編小説『手紙』の戯曲化を行なっている）ではフェミニズムの問題、取り分け女性の経済的自立と性の解放の問題を取り扱っているが、エリカ・ジョングの『飛

ぶのが怖い』が出版されたのは一九七三年である。これらを見れば、モームが単に「古臭い作家」でないのは明らかだろう。

『聖なる炎』は、モームの実兄チャールズの妻ベルディとその息子（モームにとっては甥にあたる）オーモンドの実話をヒントにしている。オーモンドは十二歳の時木登りをしていて誤って落下し、下半身が麻痺してしまった。一九二七年、十七歳のオーモンドの身体の状態は思わしくなく、息子を献身的に介護する兄嫁の姿がモームの心を強く動かす。これが彼に『聖なる炎』を書かせた直接の動機だったと言われている。

なお *THE SACRED FLAME* という題は、コールリッジの詩 *LOVE* から取られたそうである。"All thoughts, all passions, all delights, / Whatever stirs this mortal frame / All are but ministers of Love / And feed his sacred flame." このことを *THE SECRET LIVES OF SOMERSET MAUGHAM*（二〇〇九）の中で教えてくれた Selina Hastings　女史は同書で、『聖なる炎』は力強く、説得力あるドラマである。取り分け注目すべきは、モームが人間の感情を幅広く捉えようとする知性だ。例によって彼は、性的なものであれ、ロマンティックなものであれ、母性的なものであれ、〝愛〟に味方し、因習的社会が持つ狭量な道徳に反対する。そして静かに、しかし決然と、寛容こそが最重要であることを力説する。たとえ極端な場合にはそれが社会のルール・法律に反することになろうともである」と述べている。

『フレデリック夫人』に続き、この戯曲を翻訳しながら思い浮かべていたのは、「この世にもし純粋な愛情というものが存在するとするなら、それは母親のわが子に対する愛ではあるまいか」という、『人間の絆』の中の言葉である。稀にみる美人だった母を八歳のとき失ったモームは、生涯母の写真

を身近に置いていたという。タブレット夫人の息子に対する愛情は勿論だが、フレデリック夫人が息子のためにパラダインとの恋の逃避行を諦めるところなど、ある意味ではモームの個人的願望ともいえる母と子の関係が表現されているように思う。（最近頻繁に起こる子殺し事件の報道を聞くにつけ、モームはなんと純朴であったかと思わずにいられない。）

ついでながら、この劇は劇団民藝により上演されたことが記録されている（一九七五年）。そのことは私も知っていたが、その時の演出は宇野重吉、主演は岡田嘉子、題は『聖火・母の総て』だったことを、このたび「日本モーム協会会誌 CAP FERRAT 十一号に掲載された澤田靖士さんのエッセイ「モームとの再会……『聖火』」で知った。ついでに訳者は菅原卓で、白水社の「現代演劇全集」（一九五四）に収められていることを行方昭夫先生が教えてくださった。但し先生の言では「めちゃくちゃな訳、何の役にも立たない」とのこと。しかし、訳文の精度がどの程度であれ、他でもないあの民藝が取り上げたということと、あの宇野重吉が演出を担当したということは、この作品が単なる商業演劇・娯楽作品ではないことの証のような気がするのだが、如何だろう。

翻訳にあたっては例によって石川芳恵先生に大変お世話になった。行方先生は私が翻訳を試みていることを知ると、御自身の試訳を惜しげもなくお見せくださり、お蔭で私の訳文に何カ所もの間違いがあることが判明して、「めちゃくちゃな訳」になることは避けられたと思う。丹沢栄一氏は細かに拙訳を原文と対照し、最後の仕上げをしてくださった。お三方にこの場を借りてお礼申し上げたい。

二〇一五年　秋